

三郷村の埋蔵文化財第7集

三郷村埋蔵文化財Ⅱ

発掘調査・試掘調査報告

2005・9

長野県南安曇郡三郷村教育委員会

三郷村の埋蔵文化財第7集

三郷村埋蔵文化財Ⅱ

発掘調査・試掘調査報告

2005・9

長野県南安曇郡三郷村教育委員会



三郷村航空写真（上が東）



五反田遺跡敷石住居（上が西）



五反田遺跡埋甕



龍峰寺柱跡痕（北から）



三角原遺跡第1号住居址完掘（南東から）



栗の木下遺跡土壙墓

序

今回の『三郷村の埋蔵文化財第7集』では、北小倉の五反田遺跡や、楡の三角原遺跡の範囲確認調査、龍峰寺焼失跡調査などここ数年の小規模調査の成果が簡潔にまとめられています。

ことに五反田遺跡では、三郷村では初めてとなる縄文時代中期の敷石住居址が発見されました。この場所は周知の埋蔵文化財包蔵地に含まれておらず、下水道工事を請負った業者から発見の一報がもたらされました。工事現場においては、発掘作業に最大限のご協力をいただきました。三郷村の歴史が埋もれることなく記録されたことは望外の喜びであり、『三郷村誌Ⅱ』の編纂にも間に合ったことは言うまでもありません。

また、三角原遺跡の範囲確認調査は、村誌編纂委員の丸山善太郎氏のご厚意により、遺跡近くに所有する畑地で実施されました。折りしも広域排水路事業による三角原遺跡発掘調査により、遺跡の概要が明らかになってきた時期だけに、この調査は意義深いものとなりました。これにより三角原遺跡の範囲がほぼ特定でき、今後の歴史解明の貴重な資料とすることができました。

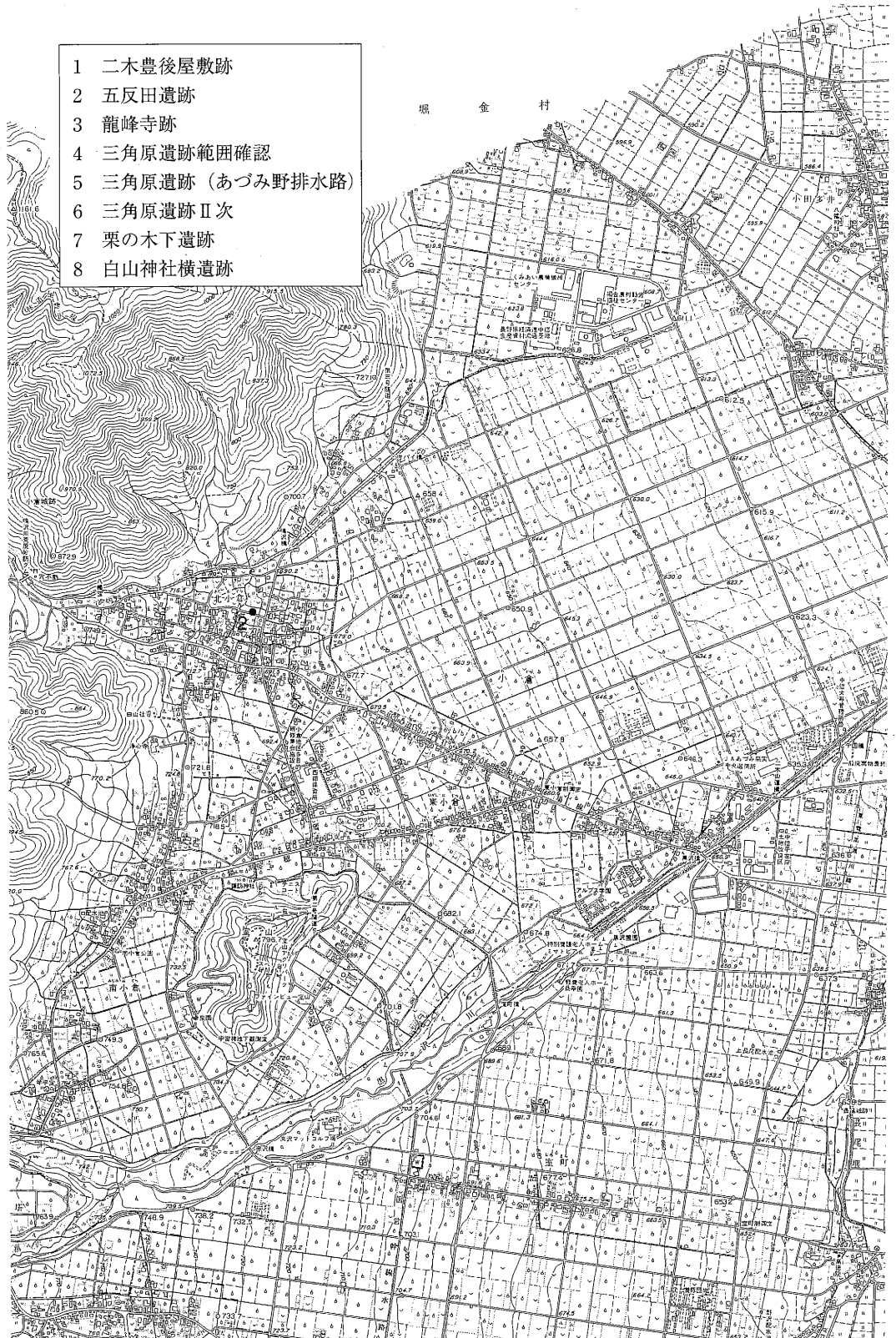
そのほか、民間の宅地造成事業にかかるため、明治元年に焼失した記録のある龍峰寺跡を緊急に調査しました。周知の埋蔵文化財包蔵地でないという制約などもあり限られた調査でしたが、焼けた柱穴が整然と出現し、当時の出来事に思いを馳せました。

今回の『三郷村の埋蔵文化財第7集』は、三郷村最後となる埋蔵文化財報告書です。専門の学芸員を置くことのなかった三郷村では、その調査の多くを村外の先生方にお願いしてきました。ことに松本市梓川の山田瑞穂先生には、第1集の黒沢川右岸遺跡調査以降、三郷村におけるほとんどの試掘調査、本発掘調査に携わっていただきました。この機会をお借りして、心より感謝とお礼を申し上げる次第です。

また、東小倉遺跡Ⅳ次調査以降、三郷村の遺跡に関わっていただいた今村克氏を始めとする発掘関係者の皆さん、五反田遺跡の発見報告と調査へのご協力をいただいた(有)中部エンジニア石曾根榮社長ほか、ご協力いただいた多くの方々に心より感謝を申し上げます。

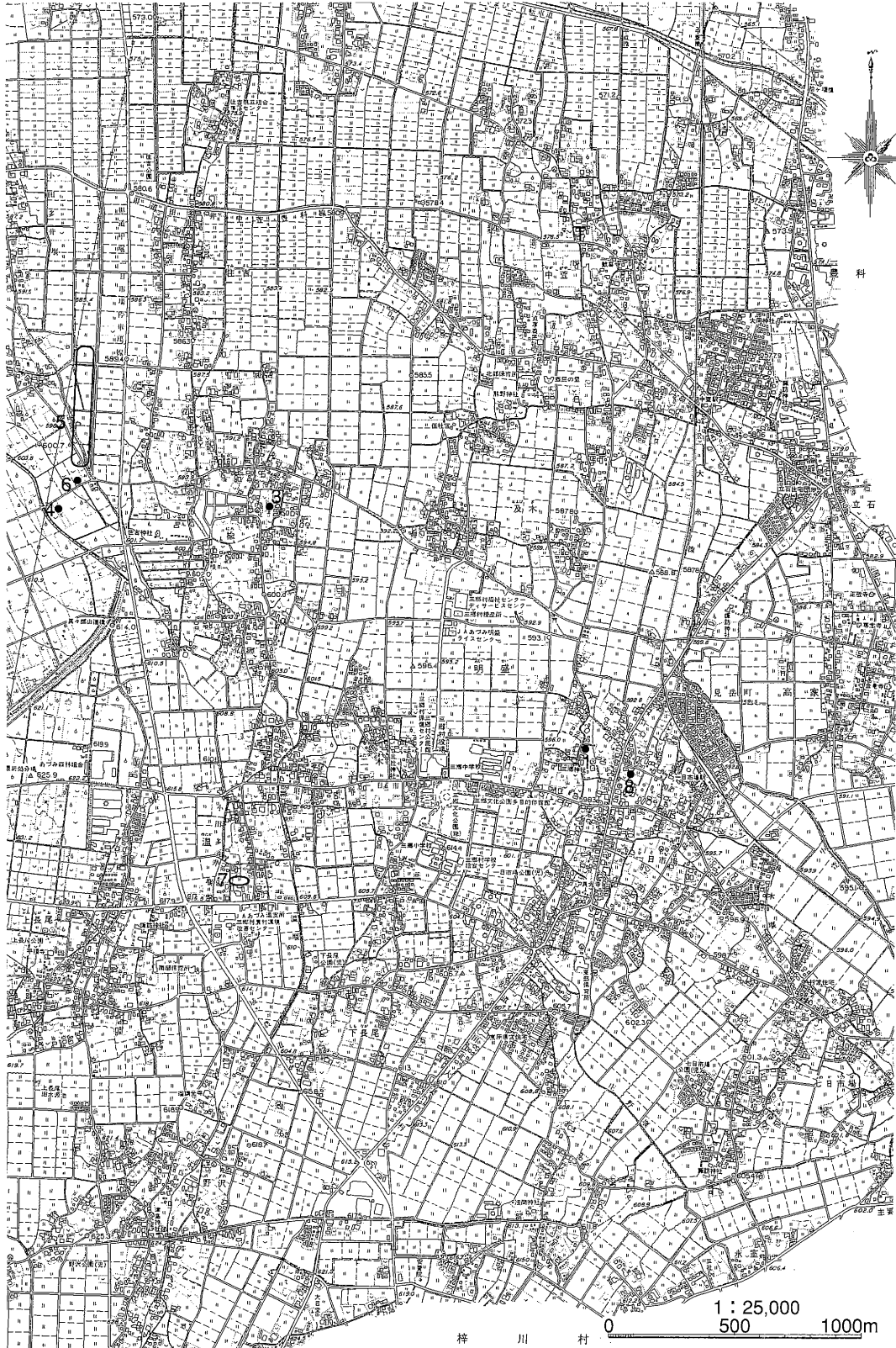
平成17年9月

三郷村教育委員会
教育長 中村 孝信



- 1 二木豊後屋敷跡
- 2 五反田遺跡
- 3 龍峰寺跡
- 4 三角原遺跡範囲確認
- 5 三角原遺跡(あづみ野排水路)
- 6 三角原遺跡Ⅱ次
- 7 栗の木下遺跡
- 8 白山神社横遺跡

第1図 調査位置図



科

梓川村

1 : 25,000
0 500 1000m

例 言

- 1 本書は、長野県南安曇郡三郷村教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査および試掘・確認調査等の記録を収録した埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 本書には北小倉の五反田遺跡発掘調査や、楡の三角原遺跡の範囲確認調査、龍峰寺焼失跡調査など『三郷村埋蔵文化財（資料集）』以降の小規模発掘調査、試掘調査、範囲確認調査成果を収録した。
- 3 調査は、三郷村教育委員会が調査団等を組織するなどして実施した。
- 4 本書の編集は、主として那須野雅好と山田瑞穂、今村克が行い、中田育成、佐々木信子がこれを補った。
- 5 本書の執筆は、調査団で決定した分担によって行い、各章末に氏名を明記することにより文責を明らかにした。
- 6 本書収録各報告の地質・岩石等については木船清氏の玉稿、ご教示を得た。
- 7 調査の諸記録・実測図・遺物は、三郷村教育委員会において保管している。

目 次

序

例言・目次

第1章 二木豊後屋敷跡試掘調査	1
第2章 五反田遺跡発掘調査	3
第3章 龍峰寺跡試掘調査	23
第4章 三角原遺跡範囲確認調査	31
第5章 三角原遺跡試掘調査（あづみ野排水路）	36
第6章 三角原遺跡Ⅱ次発掘調査	39
第7章 栗の木下遺跡試掘調査	47
第8章 栗の木下遺跡（『三郷村の埋蔵文化財（資料集）』追記）	51
第9章 白山神社横遺跡試掘調査	55

写真図版

抄録

第1章 二木豊後屋敷跡試掘調査

1 調査位置

三郷村大字明盛1710番地1

2 調査に至る経緯とねらい

小笠原貞慶から西牧領分の代官に任命された二木豊後の屋敷（東西30間、南北20間）が存在したとされる地が宅地造成されることになった。これまでに遺物や遺構が確認されていないため、周知の埋蔵文化財包蔵地には指定されていないが、古くより二木豊後の屋敷跡とされてきた経緯から、その確認調査を実施するに至った。この調査では屋敷跡に伴う遺構（建物址の礎石や掘立柱建物の柱穴、堀や土塁の痕跡等）の確認と出土遺物と二木豊後の屋敷との関連に主眼をおいた。

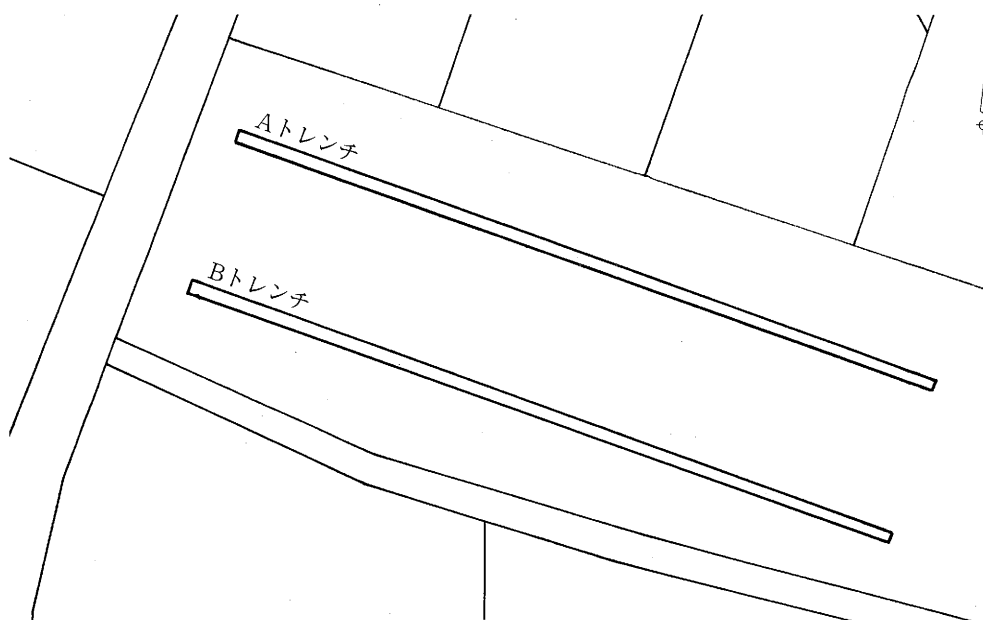
3 確認調査日

平成13年9月18日(火)

4 調査参加者

調査指導員：山田瑞穂

調査員：福島 嗣・赤羽根嘉矩・曾根原孝和・矢野口佳郎・那須野雅好・西澤弘修



第2図 トレンチ配置図

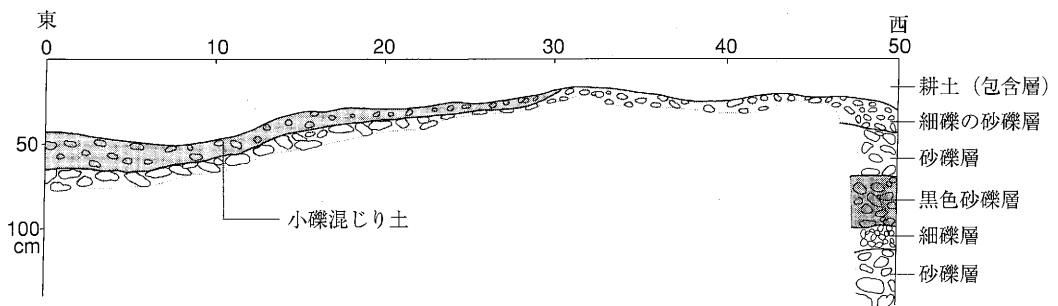
5 調査結果・所見

調査のねらいの達成をはかるべく、明盛1710番地1の水田に、第2図のように長さ50m、幅2mのA・B2本の試掘溝を東西方向に設定して、遺構の存在や出土遺物の有無に留意して実施した。その結果、以下の結果が得られた。

- ①土層は、水田耕作土（20～25cm）、水田のシキ（沈殿赤褐色土（1～2cm））、から砂質茶褐色土、砂礫層（第3図、木船清氏実測）と移層するのが一般的であるが、西側道路寄りには砂質茶褐色土層がなく、水田のシキからすぐ砂礫層となっている。東へ進むにつれて砂質茶褐色土が次第に増して20cmを測るところもみられる。
- ②土層から、西から東へゆるく傾斜した梓川の氾濫原が観察され、遺構等掘り込みが存在すれば容易に判別できる土層といえるが、何ら確認はできなかった。
- ③出土遺物は、内耳鍋と陶磁器の小破片が僅か10片出土したのみである。写真図版は57ページから掲載した。内耳鍋は口縁部片で、口縁部が外反する器形をとるものである（写真1）。陶器は、瀬戸美濃産の鉄釉と灰釉の掛け分けした17世紀後半～18世紀初頭の碗（写真2）、18世紀後半～19世紀の鉄釉の茶碗（写真3）、呉須の下絵の上に灰釉をかけた19世紀前半の染付碗（写真4）、産地不明（肥前産かも知れない？）であるが18世紀前半の灰釉丸碗（写真5）がある。磁器は、瀬戸産の19世紀後半の白磁小坏（写真6）がある。

以上の調査結果から、二木豊後屋敷に結びつく遺構・遺物の確認はなかった。強いて結びつけるならば、一片の内耳鍋片のみということ、他の出土遺物はすべて江戸期のものである。

（山田瑞穂）



第3図 Aトレンチ土層断面図（木船清氏実測）

第2章 五反田遺跡発掘調査

調査地は東小倉の集落から県道小倉梓橋停車場線を西へ上り、主要地方道塩尻・鍋割・穂高線と交差する地点から右折し、北に150m程進んだ西側の傾斜地にある。周辺は水田・畑地と住宅が混在している。

この場所は鳴沢川の扇頂部にあたり、標高は695～697mを測る。周辺には西側上方に才の神遺跡（縄文時代前期～晩期）、東側下方に鳴沢B遺跡（縄文時代中期中葉～後葉）がある。本遺跡出土遺物とも時期的に重なる部分があり、関連が注目されている。

1 調査の経緯

東小倉遺跡調査中の平成14年9月、下水道工事業者から教育委員会に工事中に土器が出土したとの通知があった。急遽現地で埋蔵文化財保護協議を実施した結果、工事業者の快諾をいただいて10日間程度の日程で発掘調査を行うことになった。

2 調査期間

平成14年9月12日(木)～21日(土)

3 調査方法

調査は下水道工事が行われる範囲、幅1.2m×長さ60mで行った。県道から西に30m入った地点まではすでに工事が終了していたため、これより西方へ向けて調査を進めた。重機を使用して道路基盤・客土部分を掘削し、遺物を含む黒色土上面から遺構検出面となる黄色ローム質土上面まで徐々に掘り進めた。

4 住居址

(1) 第1号住居址

位置 W20～W25

規模・形状 柄鏡形敷石住居と考えたい。主体部は直径3m。張り出し部の規模は不明確だが主体部東側に点在する石が張り出し部を形成していた一部と思われる。

検出・調査状況 黒褐色土中に土器片が採取でき、慎重に掘り下げていったところ径40～50cm程の礫上面が現れた。これまでに同工事で立ち会った東側部分では黄色土ローム上層の黒褐色土中には2cm～こぶし大までの礫は含まれていたが、このような大礫は見当たらず、礫上面からは人力で掘り下げることにした。西側へ向かって掘り進めると同程度の礫が次々と出現した。配石遺構の可能性を考え下水同工事幅を一部拡張して礫の検出に努めた。その結果、3m四方の範囲に大礫と土器片が集中して現れた。多くの礫は平坦面をそろえている点や、全体の形状から敷石住居とした。

柱穴 不明

炉址 不明

遺物出土状況 第6図は上面の遺物・礫を含めた第1段階の図である。出土した土器片は破片で礫間から出土している。まとまった個体はない。西側奥から北側の礫は残存状況がよく原位置を保っていると考えられるが、南西部はまばらに残っている状況である。主体部中央には通常は石囲い炉を持つ事例が多く見受けられるが、本住居址にはその痕跡がない。南西部の石敷きがほとんど見られないのに関連して、廃絶後の破壊を受けた可能性もある。調査は下水道管の埋設によって破壊される範囲（調査区の南半分）についてのみ石を取り外して、下部構造を観察することにした。その過程でAの石直下から埋甕を発見した。中型の深鉢を正位に据えていた。

遺物（第10～11図） 出土遺物に土器と石器がある。土器は器形の判るのが第10図1のみで、本址の埋甕である。口縁部に最大径のあるすっきりとした姿の深鉢で、口径15cm、器高30cm、底径9.5cmを測る大きさである。口縁部から下がる円形状区画内に篋描きの短線が無造作な感じに引かれているが、「ハ」の字状になっている箇所もある。中期後葉Ⅳ期に比定される土器である。

拓本は第11図の1～15である。1は無文部の多い口縁部片であり、勾玉状文が並ぶ。茶褐色をしてざらついた器面である。2は取りあげNo.11土器で、やはりざらついた感じであり、口縁下に隆帯と勾玉状文がある。3も摩滅してざらついた器面である。取りあげNo.4と6を接合した口縁部片で、沈線間には明確でないが縄文がつけられている。4～11は縄文が施された一群で、7以外には垂下する区画内に縄文がみられる。7は口縁部片で3と同手法である。12、13には細い線描きが、13には横方向に、12の底部には垂下する線の間に斜め方向にそれぞれみられる。12の斜線区は無文と斜線が交互になって3区画となっている。底径は11cmほどである。14、15は底部片で、15には隆帯が底部にまで下りている。いずれも中期後葉Ⅳ期に位置づく土器であって、本址の所属時期もそこにおけよう。

取りあげNo.は、4がNo.2、5がNo.6、11がNo.7、13がNo.10、14がNo.6、15がNo.8とされており、敷石直上のものが6、7、10、12、敷石下が8と9と記録されている。

石器は第10図1の打製石斧と2の凹石の各1点である。打製石斧は泥岩製で撥形というよりは有肩扇状形と呼ぶほうがふさわしく、敷石直上からの出土である。長さ16cmを測る。凹石は片面にわずかな凹みがみられる。安山岩製で10.7cmの長径となっている。

(2) 第2号住居址

位置 W45～W48

規模・形状 円形住居址の一部と思われるが規模は不明である。

検出・調査状況 長さ3.5mの黒褐色土の落ち込みを検出した。掘り下げていくと黄色土の床面が現れた。壁の東側はやや斜めに落ち込み、深さ22cmを測る。西壁はやや角度

を強めて立ち上がり、深さ13cmを残す。

柱穴 P1は深さ36cm、P2は深さ47cmを測る。

炉址 不明

遺物(第12図1~12) 土器片だけの出土で、器形の判るものはなく、量的にも少ない。拓本は第12図1~12である。1は取りあげNo.1土器で、口縁が内屈する器形をとっている。半截竹管工具を巧みに使って、縦、横に平行沈線を引き、口縁部には口縁と曲がり部に同工具による爪形文が刻まれている。2~12にも同様の平行沈線文がみられ、11、12は格子状になっている。梨久保式の内容をもつ一群で、中期初頭に位置づく土器である。

5 土坑

各土坑からの出土遺物は、量的にも少なく、土坑に伴うものかどうか問題も残るが、出土記録として全資料に及ぶよう配慮して図示に努めた。

第1表 土坑観察表

土坑No.	平面形	規模(cm)		備考
		長軸	短軸×深さ	
1	隅丸長方形	66	52×30	
2	不明	(110)	92×28	区域外にかかる。
3	不明	(130)	120×22	区域外にかかる。土4と接する。
4	不明	(74)	74×18	区域外にかかる。土3と接する。
5	円形	90	90×17	
6	不明	94	(80)×32	区域外にかかる。土7と接する。
7	不明	(120)	(90)×15	区域外にかかる。土6と接する。
8	不明	(74)	70×28	カクランに切られる。
9	円形	22	20×17	
10	長円形	39	24×51	
11	長円形	29	23×11	
12	円形	52	48×19	
13	円形	55	48×19	
14	円形	56	56×32	
15	不明	60	(60)×11	区域外にかかる。
16	不明	110	(110)×17	区域外にかかる。2号住居址に切られる。

(1) 土坑2 (第12図13~14)

13は櫛歯形工具による刺突文のある口縁部片で、神ノ木式土器にみられる特徴的な施文をもっている。14は胎土に繊維を含むもので羽状縄文がみられる。2片のみ出土した。

(2) 土坑3 (第12図15~16)

土器片2片の図示で、土坑2と同内容の土器である。16と同じ縄文の繊維土器片が1片あって、3片の出土である。

(3) 土坑6 (第12図17~21)

17は小破片の口縁部のため明確に把握できないが、山形をなす口縁から垂下する粘土紐状のものがみられる。中越式土器にみられ、垂下粘土紐とか垂紐貼付文と呼ばれるものである。中越式土器は胎土に繊維を含むものが少ないが、本片には胎土に繊維の含有があり隆帯上に小さな丸い刺突がみられる。18、20は縄文をもつもので、18には繊維の含有がある。19は櫛歯状刺突文のある神ノ木式土器に属するものである。21は口縁部片で、隆帯に爪形の刻目が連続してつけられている。いずれも縄文前期初頭に位置づく土器である。

5片の図示であるが他に縄文の施された繊維土器が2片あるので、本土坑からは7片の出土をみたことになる。

(4) 土坑7 (第12図22~25)

いずれも縄文の施された土器片で22~24には繊維の混入がある。他に図示しないもので繊維を含むもの3片、含まないもの1片があって、本土坑出土は8片である。前期初頭に位置づくものとみられる。

(5) 土坑10 (第12図26~29)

26は繊維を含み羽状縄文のみられるもの、27は撚糸文のつくもの、28は垂下粘土紐と横方向へ平行線がみられるもの、29は神ノ木式土器の手法がみられるもので、いずれも先記土坑と同じく縄文前期初頭に位置づく土器である。

6 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物としては土器、土製品、石器がある。

土器は大別すると3期になる、その1は縄文早期末から前期初頭にかけて、その2は前期末から中期初頭にかけて、その3は中期後葉ということになる。まとめて記したい。

まず、その1であるが、中心になるのは前期の神ノ木式、有尾式である。また、それに先行するものやそれに伴うものも若干みられて、他の時期とのつながりが考えられる。

第13図10は口縁部片で、口縁下に大型の爪形文が並ぶものである。これは石山式土器(滋賀県)にみられる特徴的な施文であり、近くでは松本市安曇乗鞍高原の位沢遺跡で出土があってそれらとの影響が考えられる土器である。早期末に位置づけられる。同図1は口縁部に縦の沈線が並んでいるもので、中越式に属するものなのかどうか迷う土器

である。17は木島式（静岡県）で、オセンベイ土器と呼ばれる器厚の薄い土器である。黒沢川右岸遺跡第3号住居址からも出土し、近くでは松本市梓川荒海渡遺跡からも出土して、この時期の遺跡ではよくみかける土器といえる。11は繊維を含み、口縁下に隆帯が横走している。25は関山式土器（埼玉県）とみられる底部片で、半截竹管工具による平行沈線が幾何学的文様につけられている。

そして中心になるのが2～9、18～24の神ノ木式土器に属する一群である。櫛歯状工具による押圧刺突が口縁部に縦につけられるという特徴をもつもので、6、7には更に下に同工具で平行線を引き再び刺突を2段につけているものである。この刺突文の下には、6、7、8でみるように縄文になるものがあり、18、19も神ノ木式に伴う縄文とみられる。また底部にも同刺突文が縦方向につけられ、20～24にみられる22の底面には刺突もある。

12～16は櫛歯状工具による刺突を横方向に並べる一群で、縦、横方向につける他、山形や菱形に施した特徴あるもので、有尾式土器の内容となっている。良好な資料を出土した塩尻市舅屋敷遺跡の報告書では、5形態、12種に分類しているが、それによると15はⅠ-13（横並び）、12はⅡ-C（山形状）、13はⅡ-A（菱形状）かⅢ-B（菱形状）ということになる。そして、これら神ノ木式、有尾式に伴うとみられる縄文の施されたものを第14図にまとめた。1～12は胎土に繊維を含むもの、13～27は含まないものである。

出土地点は、第14図7、9は1号住居址敷石上、3、14、18等をはじめ多くが1号住居址敷石下の出土となっているので、1号住居址周辺にこの期の遺構が存在したことが推察される。

次にその2の前期末から中期初頭のものであるが、前期末は第15図1、2の下島式土器2片を図示した。他は中期初頭の3～7で、特徴ある三角印刻文が3、5、6にはみられる。先記した2号住居址と同内容のものである。

その3は、第15図8～19である。拓本は沈線間に縄文の施された8～10、12～14、19、無造作に引かれたと思える沈線のみられる15、16、18、「ハ」の字状につけられた17等で、中期後葉Ⅳ期に比定される土器である。

土製品は第10図5の土製円板1点だけである。土器片利用のもので、長径3cmの大きさである。

石器は第10図3、4の打製石斧である。3はNo.23遺物で、長さ11.5cmを測る泥岩製のもの、4は長さ7.7cmの砂岩製で、マンホール西出土となっている。

7 小結

この調査で確認された遺構については、敷石住居址をはじめ好資料を得たことは特筆すべき内容といえる。敷石住居址は近くでは松本市梓川荒海渡遺跡で確認されているが、三郷村では初めてのもので、よい資料提示となった。更に東小倉遺跡でも期待される住

居といえる。

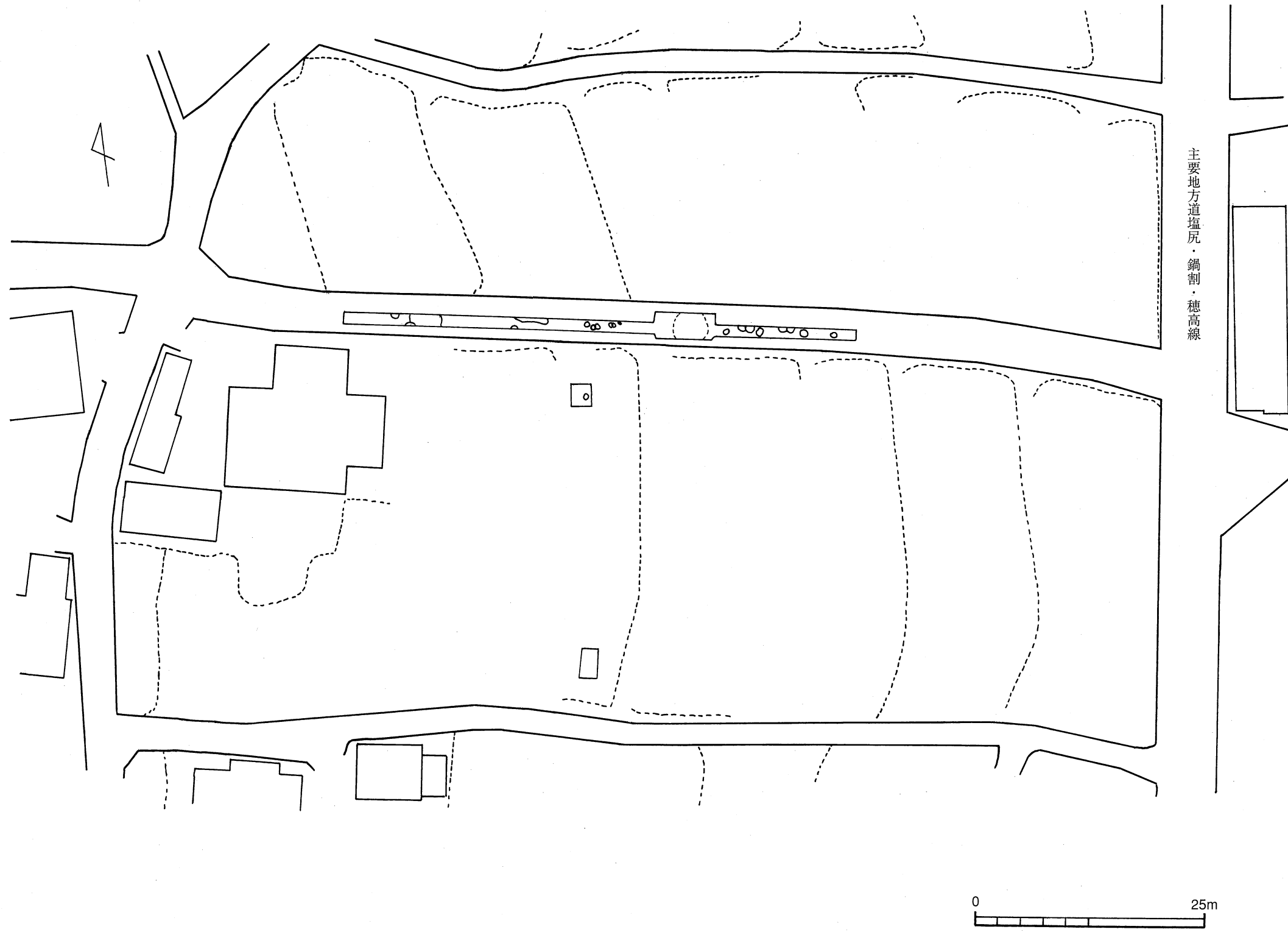
次に土器であるが、縄文前期土器は、調整池北、黒沢川右岸、才の神の各遺跡で出土はしているものの、神ノ木式土器の量的にも多い内容は特記すべき好資料の提示といえる。また相伴土器から他地域との関連を考える資料を得たことにもなる。更に才の神遺跡の拡がり把握したことにもなり、五反田遺跡の資料提示は大変大きな成果といわねばならない。

この資料提示の基になった遺跡発見は、工事の遅延を省みず、教育委員会にその連絡をしてくれた(有)中部エンジニアの石曾根榮氏の埋蔵文化財に対する理解や協力があった結果であって、ここに改めて敬意を表したい。不幸な運命をたどり闇の中に消え去る可能性のあった遺跡だが、その努力で世に出た次第で、限りない喜びを感じるものであることを付記しておく。

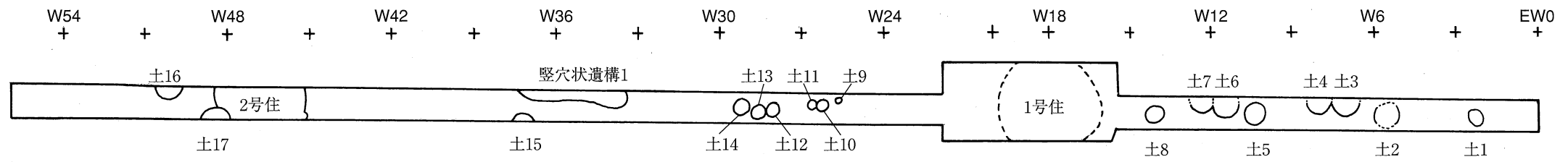
(山田瑞穂、今村 克)

参考文献 (五十音順)

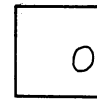
- 朝日村教育委員会 2003『熊久保遺跡第10次発掘調査報告書』朝日村教育委員会
梓川村教育委員会 1978『荒海渡遺跡発掘調査報告書』梓川村教育委員会
安曇村教育委員会 1997『安曇村誌』安曇村教育委員会
神奈川考古同人会縄文研究グループ編 1983『神奈川考古第17号 (シンポジウム'83) 縄文時代早期末・前期初頭の諸問題 土器資料集成図集』神奈川考古学同人会
塩尻市教育委員会 1982『舅屋敷』塩尻市教育委員会
中部高地縄文土器集成グループ 1979『中部高地縄文土器集成 第1集』中部高地縄文土器集成グループ
長野県史刊行会 1988『長野県史 考古資料編』長野県史刊行会
長野県埋蔵文化財センター 1978『阿久遺跡 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 —原村 その5—』日本道路公団名古屋支局・長野県教育委員会
富士見町教育委員会 2004『坂平』富士見町教育委員会
八幡一郎 1976『信濃大深山遺跡』川上村教育委員会



第4図 調査位置図



W30
S6
+



土18

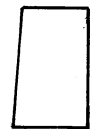
試掘トレンチ1

+

W30
S10



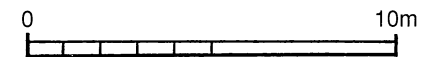
W27
S35
+



試掘トレンチ2

+

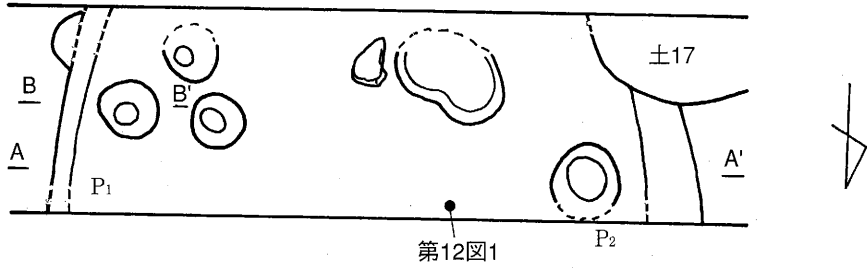
W27
S40



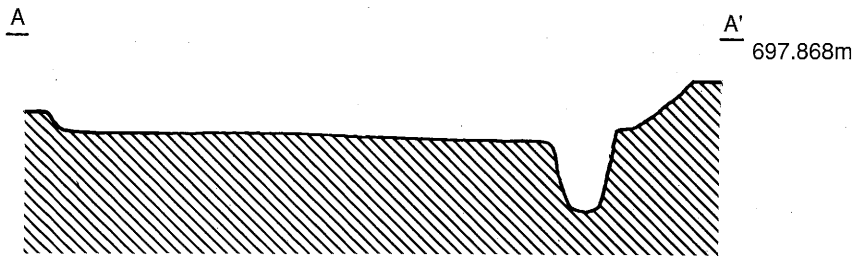
第5図 遺構配置図

+

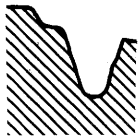
+



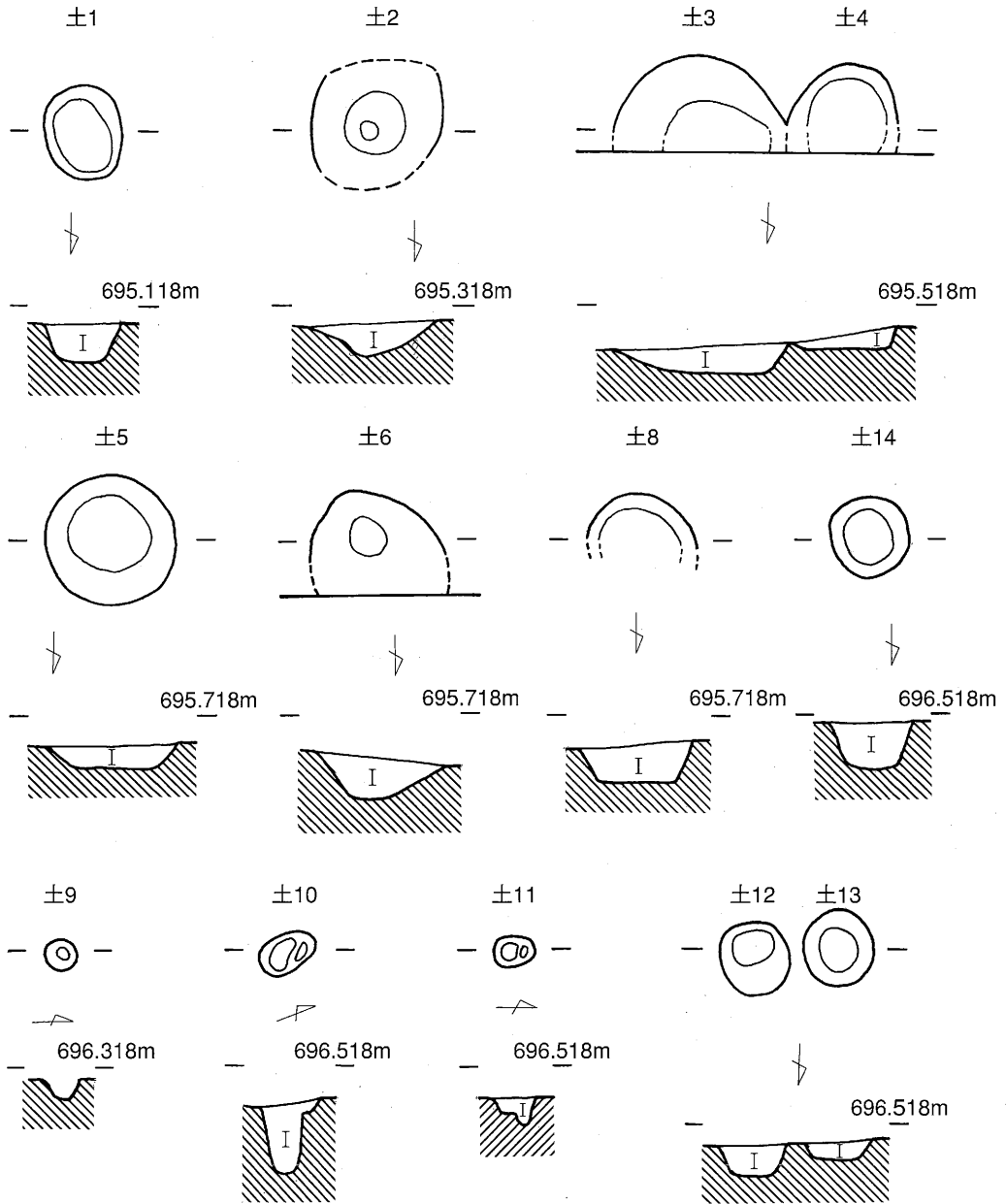
第12图1



B B' 697+868m

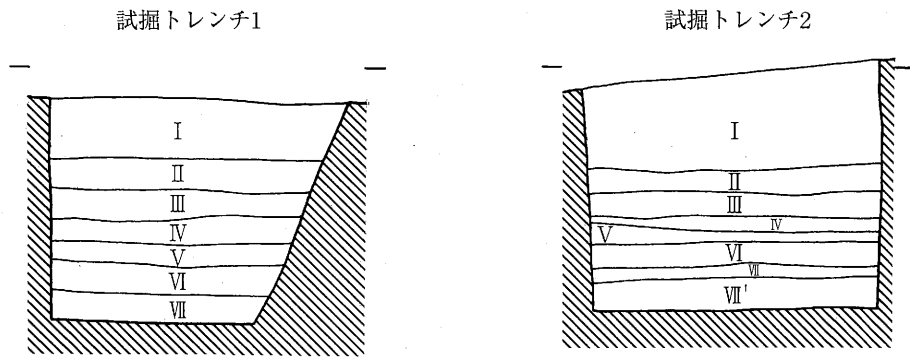
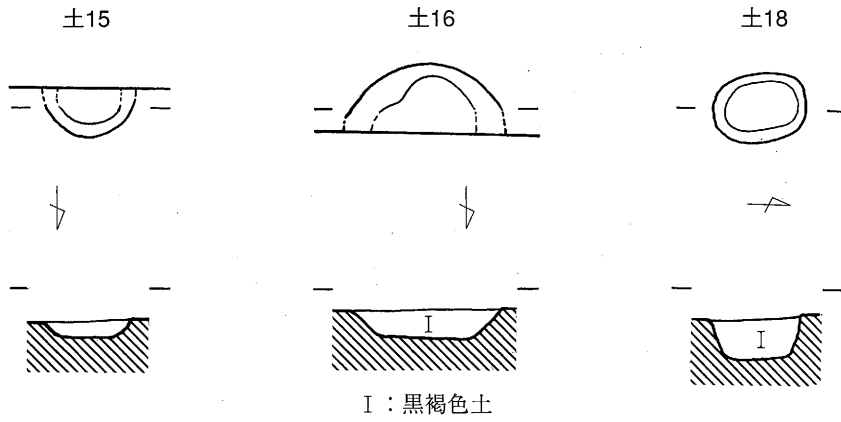


第7图 第2号住居址



I : 黑褐色土

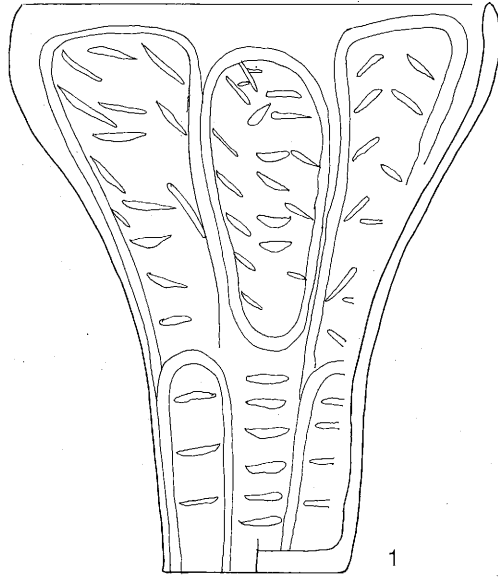
第8图 土坑



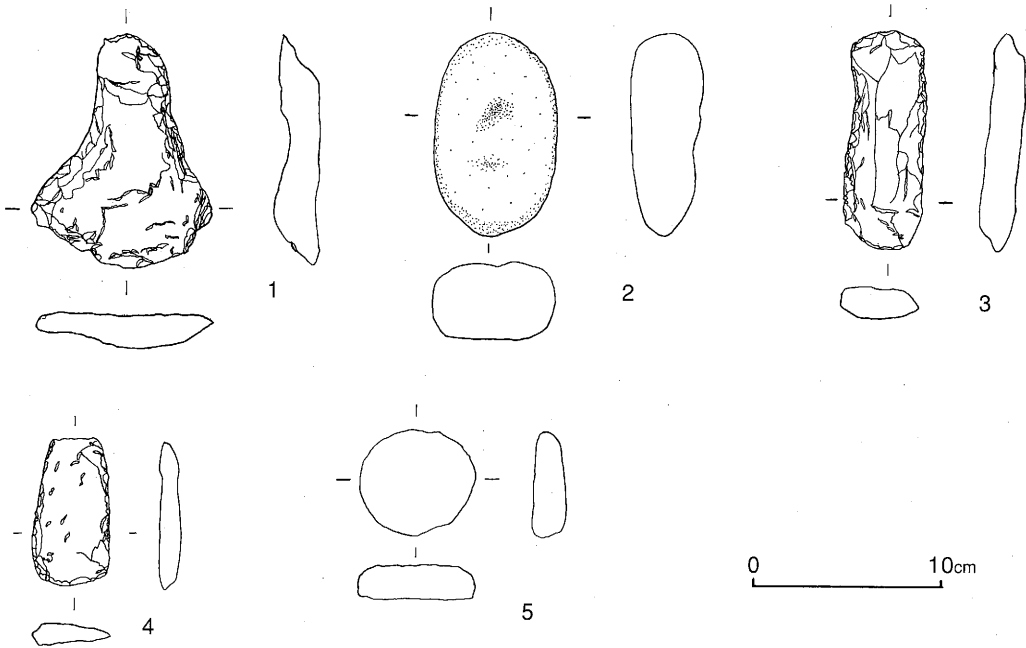
- | | |
|---------------|--------------------|
| I : 客土 | V : 茶褐色土 |
| II : 灰色土 | VI : 黒褐色土 (土器片混入) |
| III : 鉄分灰色土混入 | VII : 暗褐色土 |
| IV : 鉄分沈殿層 | VII' : 暗褐色土 (小礫混多) |



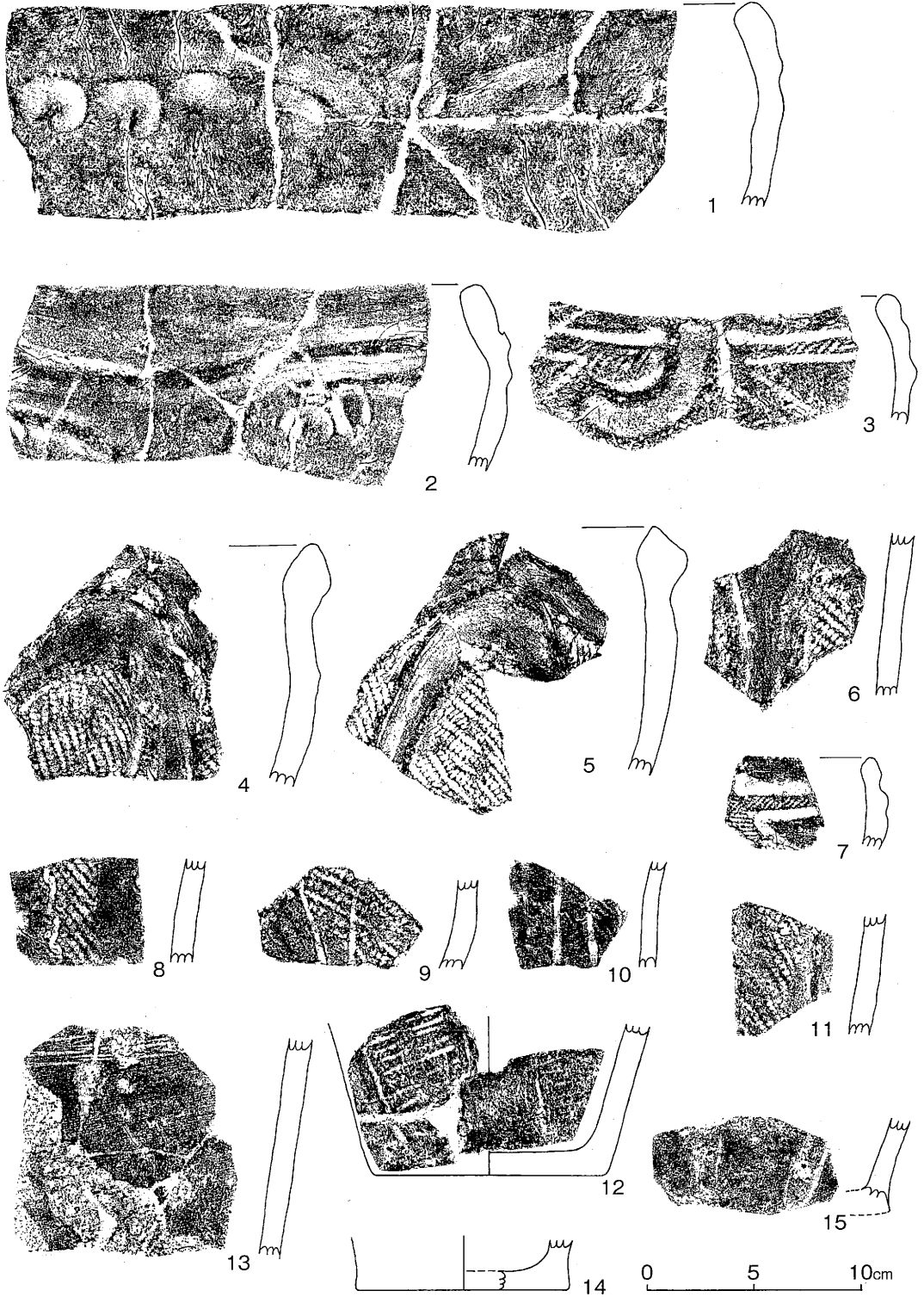
第9図 土坑・試掘トレンチ土層図



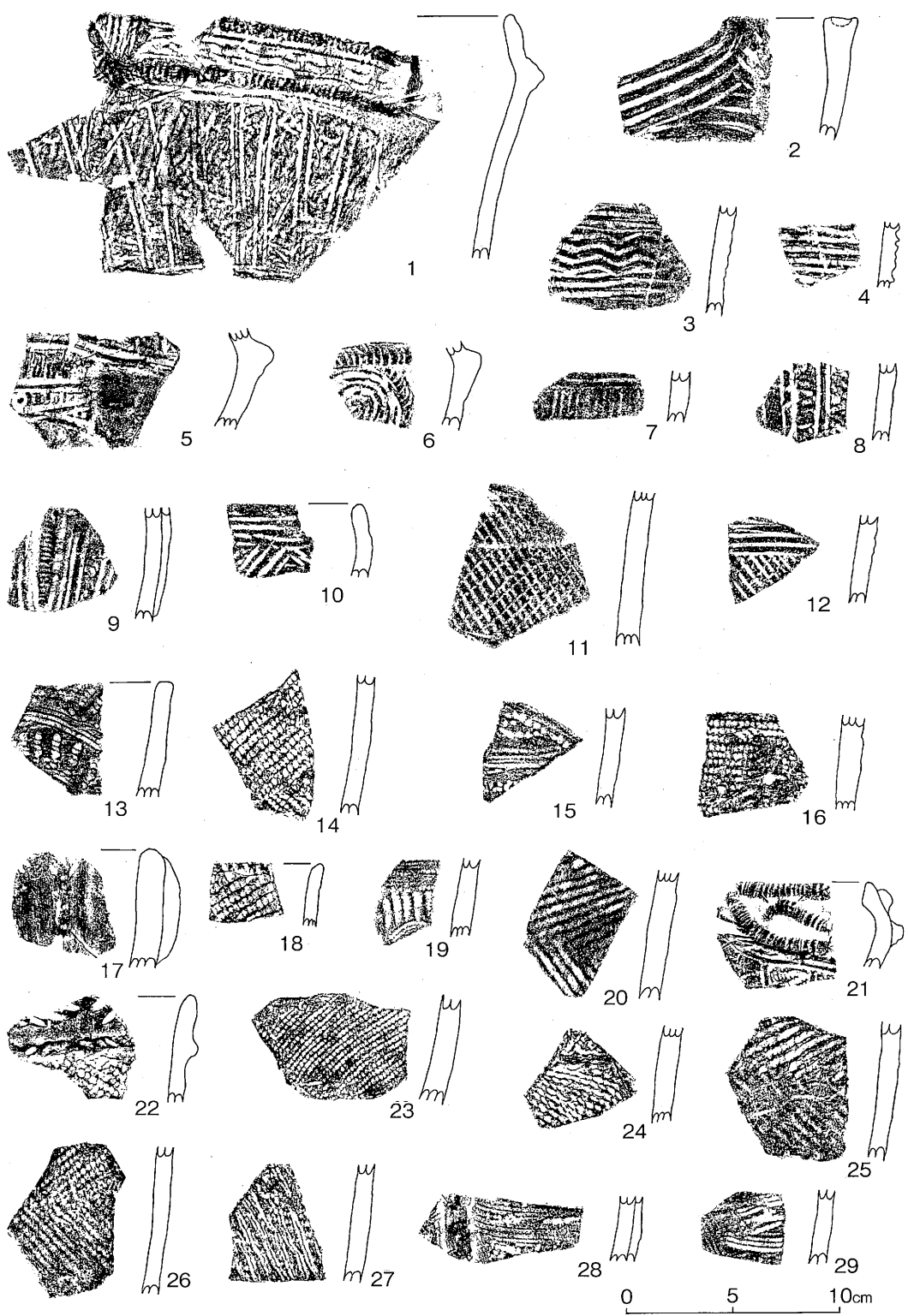
0 10 20cm



第10図 第1号住居址埋甕・出土石器・土製円板（5以外は1:4、5は1:2）

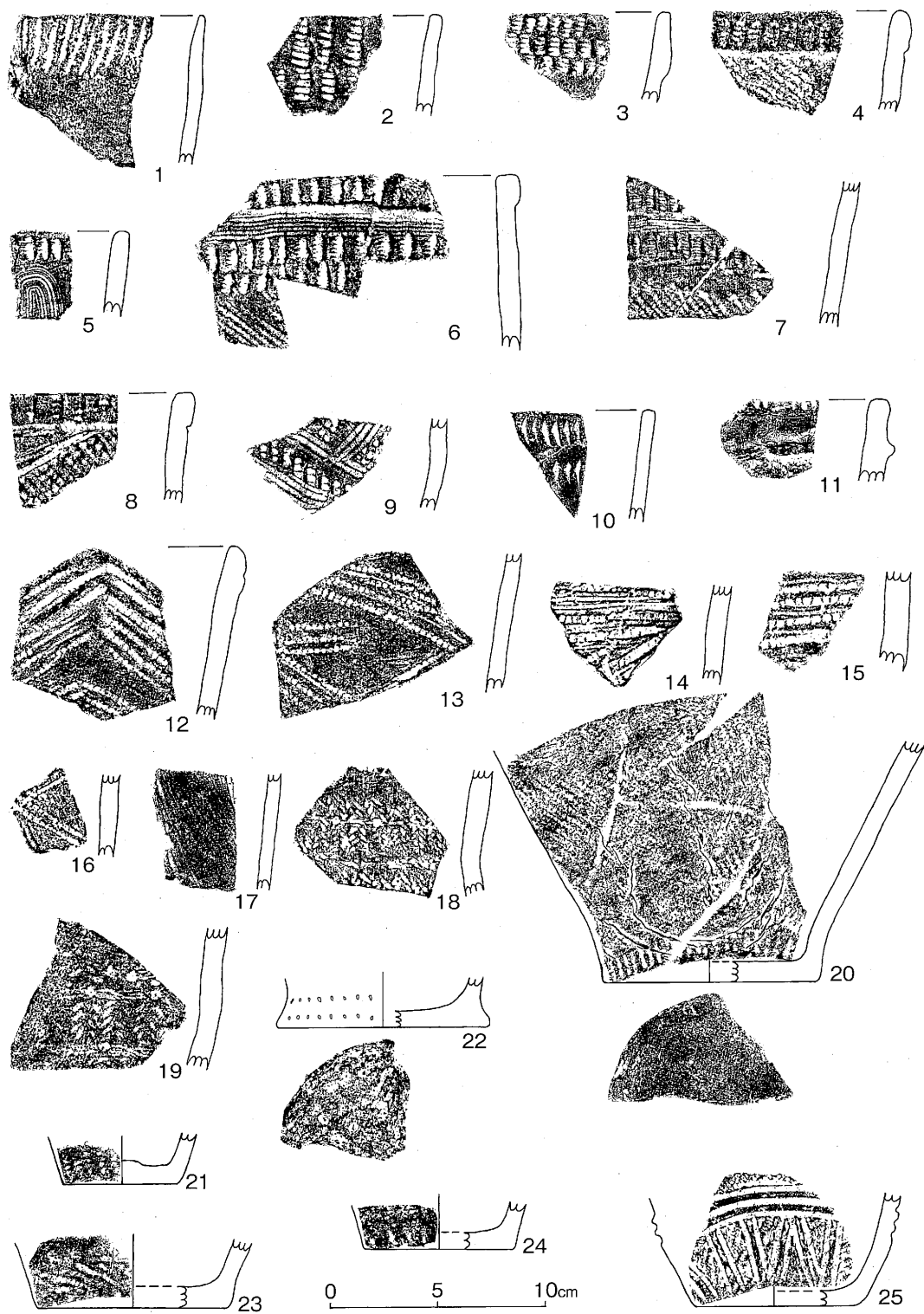


第11图 第1号住居址出土土器拓影

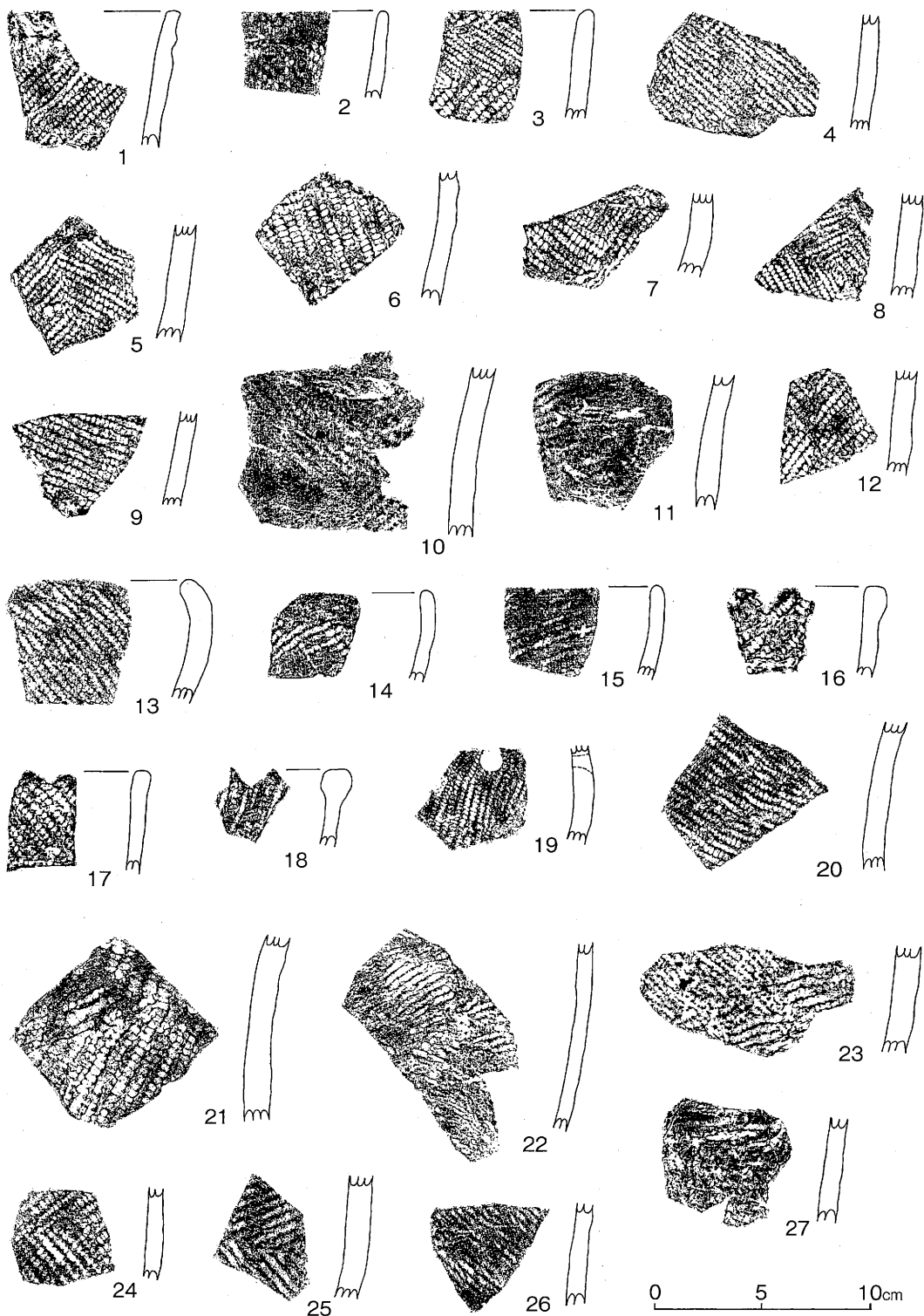


第12图 第2号住居址、土坑2·3·6·7·10出土土器拓影

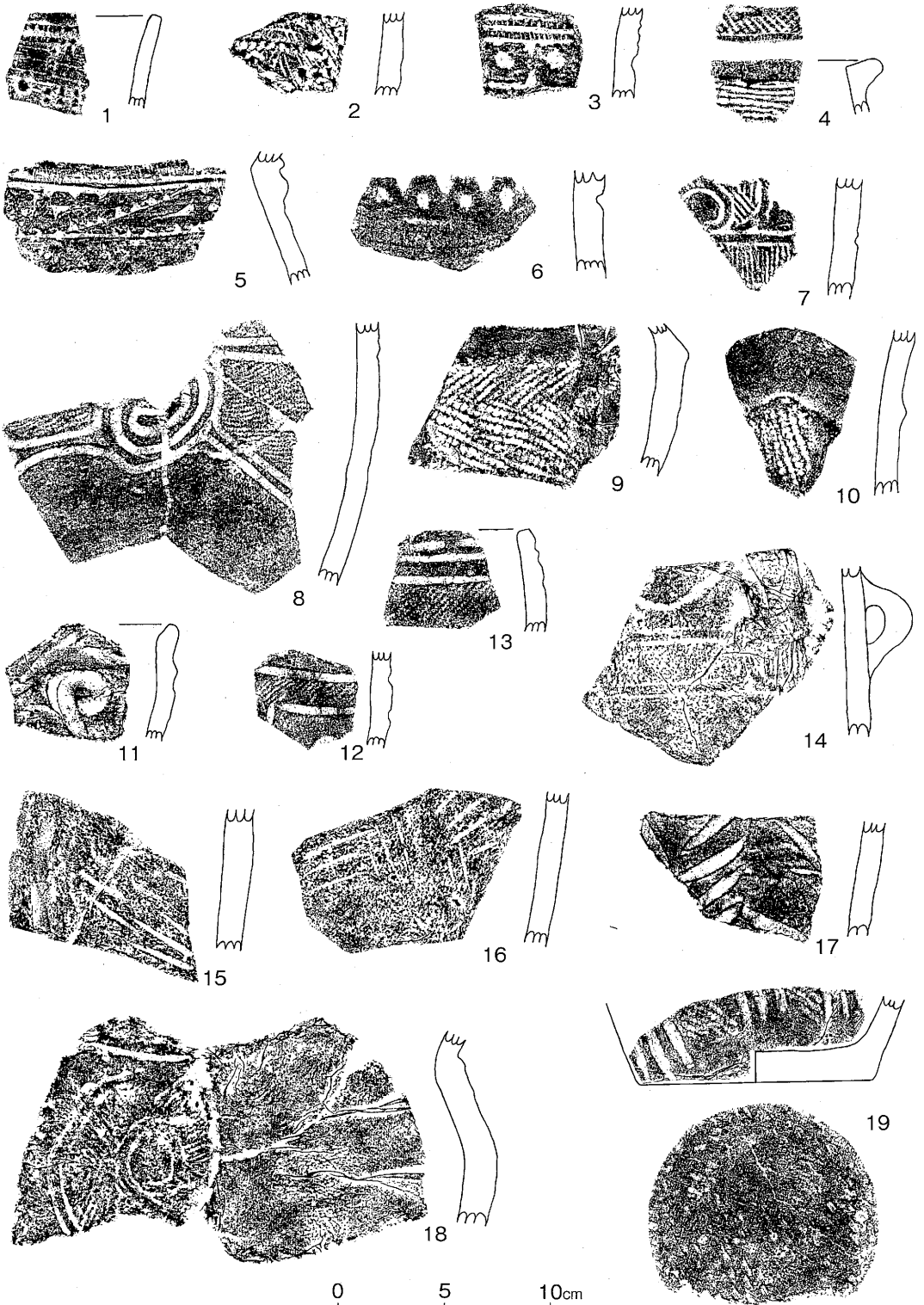
(1~12-2住、13~14-土坑2、15~16-土坑3、17~21-土坑6、22~25-土坑7、26~29-土坑10)



第13図 遺構外出土器拓影 (その1)



第14図 遺構外出土器拓影（その2）



第15図 遺構外出土土器拓影 (その3) (1:3)

第3章 龍峰寺跡試掘調査

1 調査位置

三郷村大字温5635番地 1

2 確認調査日

平成15年7月28日(月)

3 調査参加者

調査指導員：山田瑞穂

調査員：那須野雅好・中田育成・丸山善太郎

4 調査の目的と方法

龍峰寺は明治の廃仏毀釈後、水田化されたり、住宅建設があったりして、その所在は必ずしも明確とはいえないものがあつた。今回その想定地付近の水田に住宅建設計画が進行しているため、急遽立合調査を実施して、明治元年火災に遭遇したといわれる龍峰寺の遺構やその規模を確認することとした。

方法はトレンチ法を採用し、大字温5635番地1の水田に、南北方向に試掘溝を設定し、重機により掘り下げを行つて遺構・遺物の存否と土層の状況を確認することとした。

5 調査の結果

(1) 地質・土層

龍峰寺跡の地質は住吉神社東周辺を中心として、厚いローム層が堆積していたが、楡公民館周辺ではこのローム層はみられなかつた。龍峰寺跡周辺の柱状図を(第16図)に示す。

地表が水田になっているこの周辺の耕土の厚さは20cm位で浅く、その下部は小礫混じりである。その下に10cmばかりの砂礫があり、3cm大の礫を主に含んでいる。その下は黒褐色でローム混じりの土壤で、部分的に酸化鉄のしみこみが見られる二次的な層を示す。地表から80cm以下は茶褐色の砂礫層に含まれる礫の大きなものは5cm大である。この周辺は農耕には余り適さなかつた場所ではなかつたかと思われる。

土層は、第Ⅰ層が水田耕作土で20~22cm、その下に第Ⅱ層の砂礫を含む茶褐色土(水田のシキ)が18~23cm、そして第Ⅲ層に黒沢川の氾濫とみられる砂礫が80cm程堆積し、第Ⅳ層の黄褐色粘土質ローム土に続くという層序が一般的な土層として観察された。

火災にあつたとみられる地点では、第Ⅱ層が赤褐色を呈し、下部に黒色土の帯が1~

2 cm程みられた。柱跡痕は第Ⅱ層下部から第Ⅲ層上面部にみられた。

(2) 柱跡痕

南北方向に設定したA、B、Cの各トレンチに、柱を立てたと考えられる跡が確認されたので「柱跡痕」としてとらえた。柱跡痕の配列及びその規模から、残されている龍峰寺建物の間取り絵図と大筋で合致することが判明した。また火災に遭遇していることも判明して、必ずしも明確ではなかった龍峰寺の位置を特定できた。柱跡痕は、確認段階では4種あるように観察された。

その1は、第18図1～4で見えるような礎石のバランスをとったのではないかと考えられる石のみられるものである。石の周辺は径40～50cm茶褐色土が固められていて、その下の砂礫層に10cm程の凹みがみられる。この凹みは人為的に掘り凹ませたのか、胴突きで地固めをした際に砂礫層が沈んでできたのかかわからないが後者のような感じがする。石の周りの堅い面は円形ないし隅丸方形をなしている。4の柱跡痕29は長楕円形内にバランスが充満していて1～3と異なるが石をもつことで共通点を持たせた。この仲間が圧倒的に多く、柱跡痕1、2、5、6、7、12、13、14、21、22、23、24、26、27、29、30、32、34、35、39、41、42、43、44、45、46がある。

その2は、第18図5、6にみるもので、その1のような石はなく、バランスが固められた状態でみられるものである。その1同様に下に浅い凹みをもつ。柱跡痕3、8、9、10、11、15、16、18、25、33、36、37が同内容であり、その中でも8、9、10、11、16、18、36は中央部の小石がよく焼けて赤変している。上に礎石があれば、このような赤変は不可と思われるので直に柱があったのであろうか。

その3は40～50cmの径で凹みがみられるもので、第18図7、8に示した。凹みの底面に若干の堅さがみられるが焼けた痕跡は凹みそのものには観察されなかった。柱跡痕4、17、19、20、28、31、47、48があり、28の凹みの両側に4個の石が存在したので、水田造成の際に抜かれたものか考慮したが不明である。抜かれたものとすればその1と同内容となるが、凹みの深さから違いがあるように観察されたので別にした。

その4は、第20図の柱跡痕39、40の柱穴である。断面図でみるように径40～50cmで深さも40～50cmの柱穴である。その1～3とは異なるもので初期の龍峰寺に関わるものかもしれない。

以上調査時の観察所見から4類型に大別したのであるが、水田造成時の破壊で共通点があったものが存在したかもしれない。礎石跡としないで柱跡痕と呼称した理由もそこにあり、今後の検討を待ちたい。

また焼けた痕跡のみられる柱跡痕は8、9、10、11、12、13、14、16、23、33、34、35、36で、他の大部分は焼けた跡に作られたもののようみえた。

(3) 本堂・庫裏

検出された柱跡痕から、本堂は柱跡痕1～32（14、23、32は玄関部と共通）が想定さ

れ、南北8間、東西6間の建物と判断される。この規模は残されている焼失龍峰寺間取図より東西で1間分少ないが、火災の直後再建築したものは6×8間という伝承があることからそれと合致する建物となる。

しかし大筋では合致するものの柱跡痕の配列には若干の理解に苦しむ疑問点がある。それは南北の列はほぼ1間180cmの配置であるのに対して東西の列はそうでない柱間があることや、柱跡痕7～14の列では8～14が焼けた痕跡が残り再建でも使われたのかどうかという点である。

庫裏は西半の一部分は存在が判明したが、東部は既設住宅地のため立合調査区域外となって全貌は不明である。柱跡痕34、36～48が庫裏に関わるものと思われるが不整さがみられる。しかし焼失間取図と同様に本堂、玄関、庫裏と柱跡痕が検出されたことから、間取図のような規模の庫裏であったと推察される。柱跡痕42の東には、30×25cmの範囲に焼土がみられ、土間であったことが考えられる。絵図の土間とは若干ずれている。

次に本堂と庫裏の間に間口2間の玄関があることも判明し、図の通りである。玄関を入った土間と考えられる左側に据えつけた大甕の出土があった。手洗い、笠立て、防火貯水等種々考えられるが、如何なる性格を有する大甕であろうか。大甕は火災の際に壊れたのか胴部上半は器内に落ち込んだ状況であり、器内には更にもう一個体の甕も入れられていた。残存胴部径64cm、深さ45cmを測り、甕を据えつけるために周囲を大甕の寸法に合わせて6～10cm、底面で2cm程の余裕をもって砂礫層を掘り凹めて据えたことが第21図5の断面図から観察できる。大甕内には先記の1個体の他には茶褐色土と炭化物が混入していた。また断面図から推察し、第I層の耕作土下部が当時の玄関面であったと考えると大甕は更に12cm程は埋めた状態で、それから口縁部にかけては空間にあった姿となる。

火災に遭遇したことは記したが、本堂と玄関部は全体的によく焼けた状態が柱跡痕やその周辺で観察された。庫裏は西半分で焼けた痕跡が窺えたが、東へ移るにつれそれは稀薄な感じであった。焼け跡を整地したため、柱跡痕の外側にも焼土や炭化物がみられた。

(4) 出土遺物

数量的に極めて少なく、大甕、鉢、内耳土器、鉄釘の出土をみたのみである。

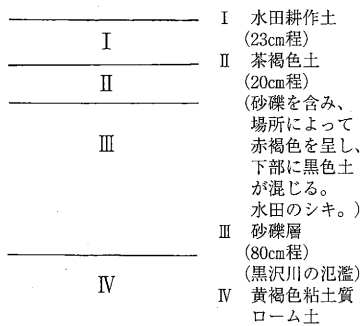
大甕（第21図1）は記述した玄関横に据えられていたものである。底径22cm、推定口径72cm、器高約90cmのもので器厚は1.5cm前後である。口縁部は、巾約7cmの鐮状の平らな口縁をなしている。全体的に赤褐色を呈し、胎土はよい。焼成は普通であり、水分を含んだ部分はやや脆い感じがする。

鉢（第21図2）は、大甕の中に入っていたもので、口径44cm、底径21cm、器高27cmを測る。器厚は1.5cmで、口縁部は肥厚した鐮状の口縁部となっている。胎土、焼成共に良好で、口縁部は紫色を帯びた赤褐色、底部は赤褐色をし、堅く焼きしまっている。

内耳土器（第21図3）は、口縁と底部は不明であるが推定胴部径25cm程の大きさである。内面茶褐色、外面黒褐色を呈し、胎土、焼成共良好である。外面の黒色はふきこぼれによるこびり付きであろう。先記の大甕や鉢に先行する土器であろう。Bトレンチ焼土近くからの出土である。

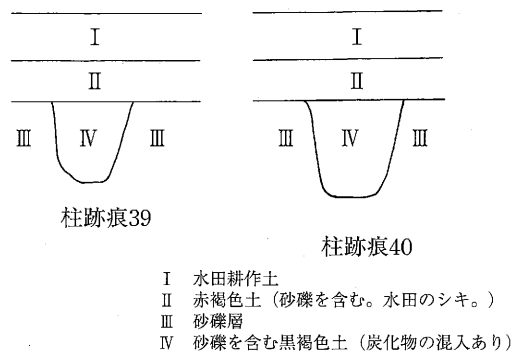
鉄釘（第21図4）は長さ5cmの角釘であるが、錆で膨んでいる。内部芯には黒色の鉄の部分が明確に残り四角い断面をなしている。Bトレンチ玄関横からの出土である。

（山田瑞穂）

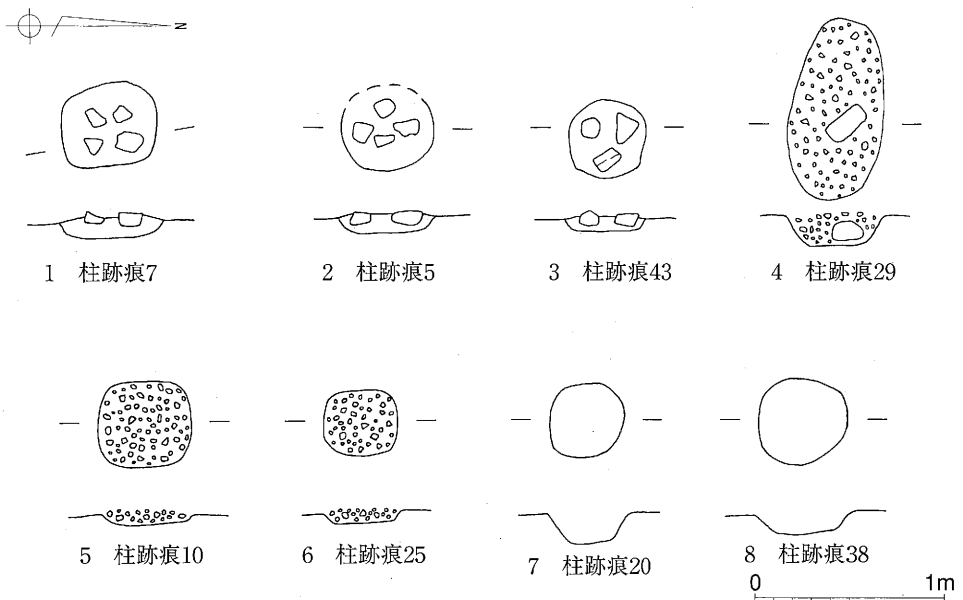


土層概念図

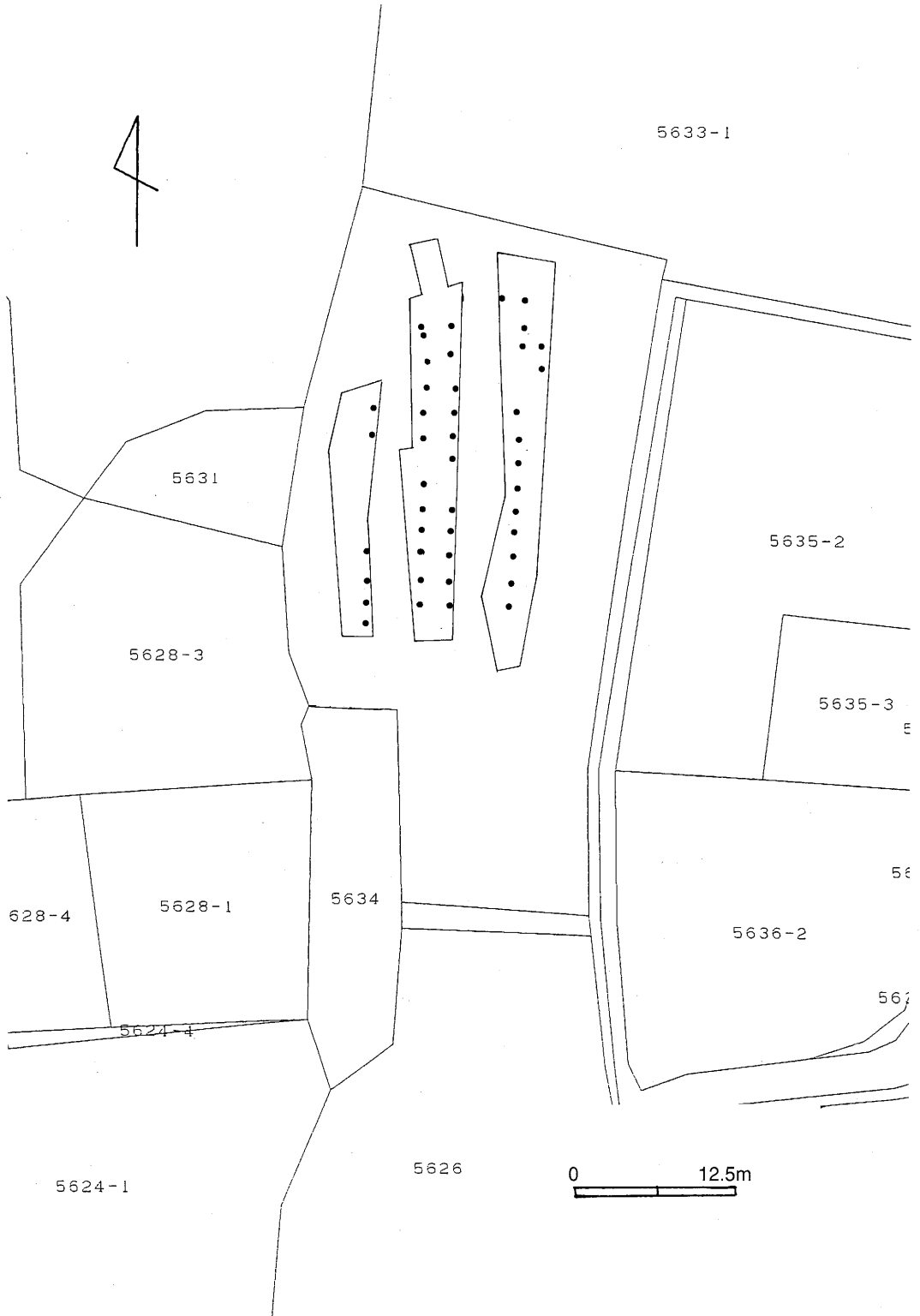
第16図 土層概念図



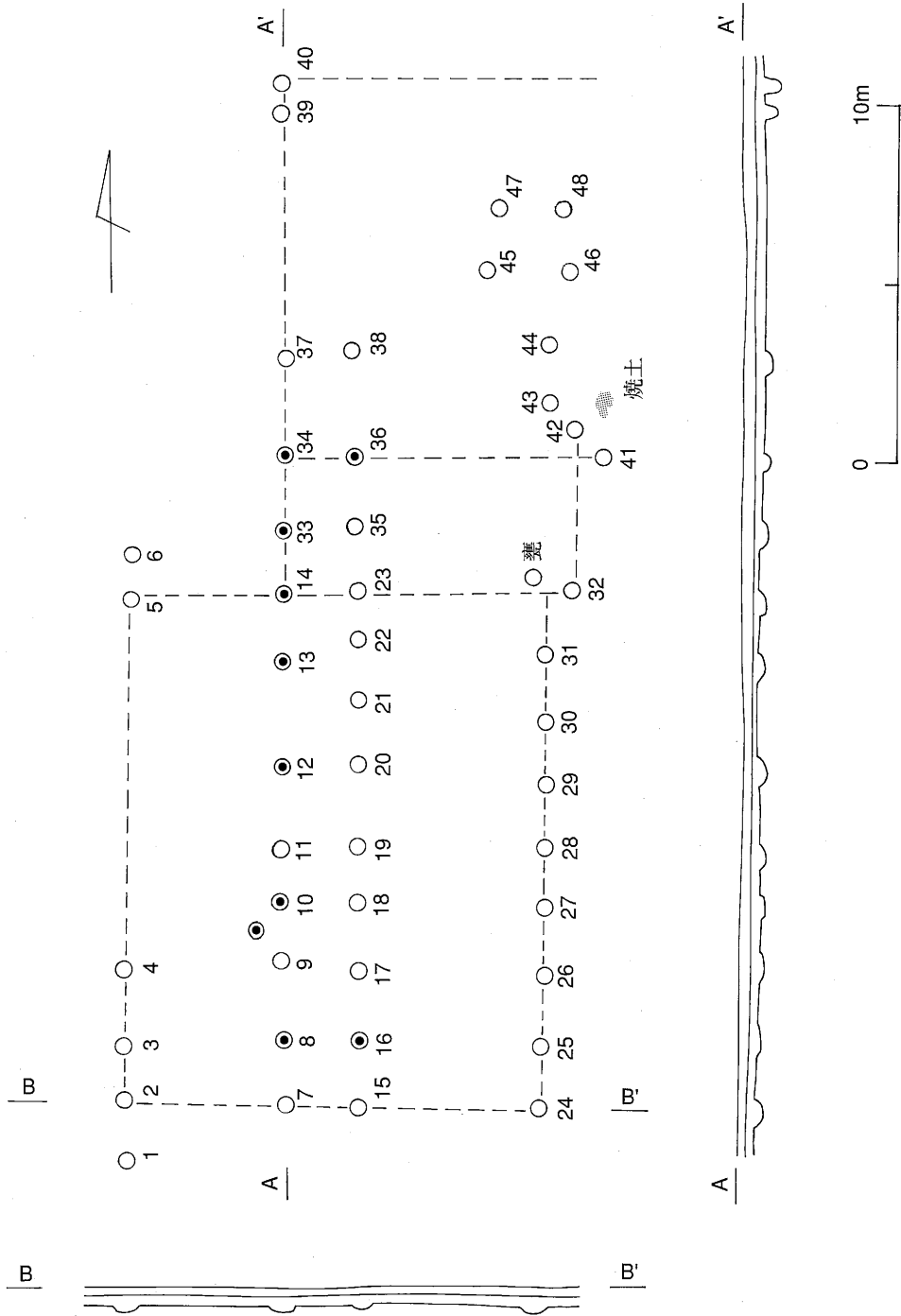
第17図 柱跡痕土層断面図



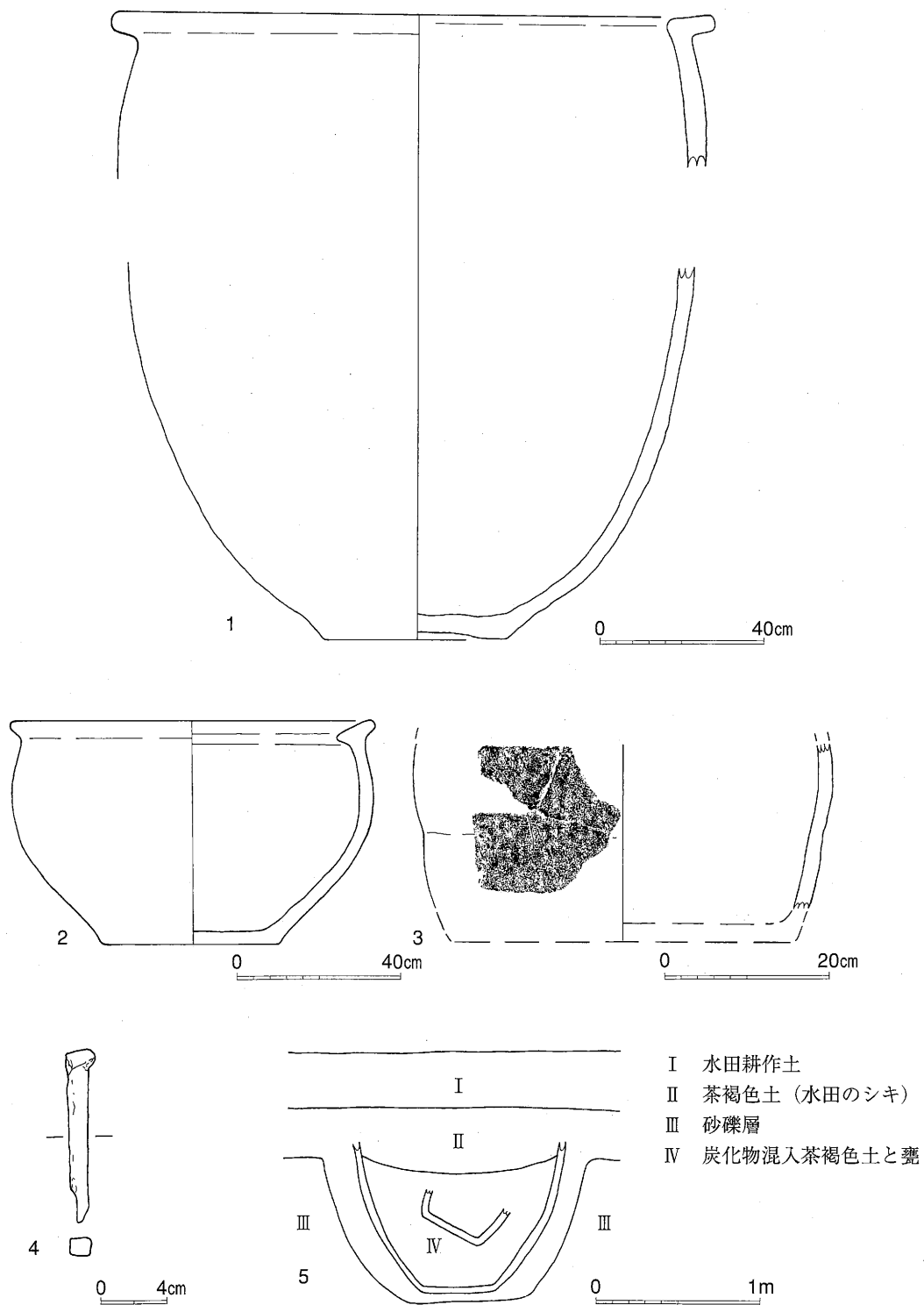
第18図 柱跡痕実測図



第19図 調査位置図

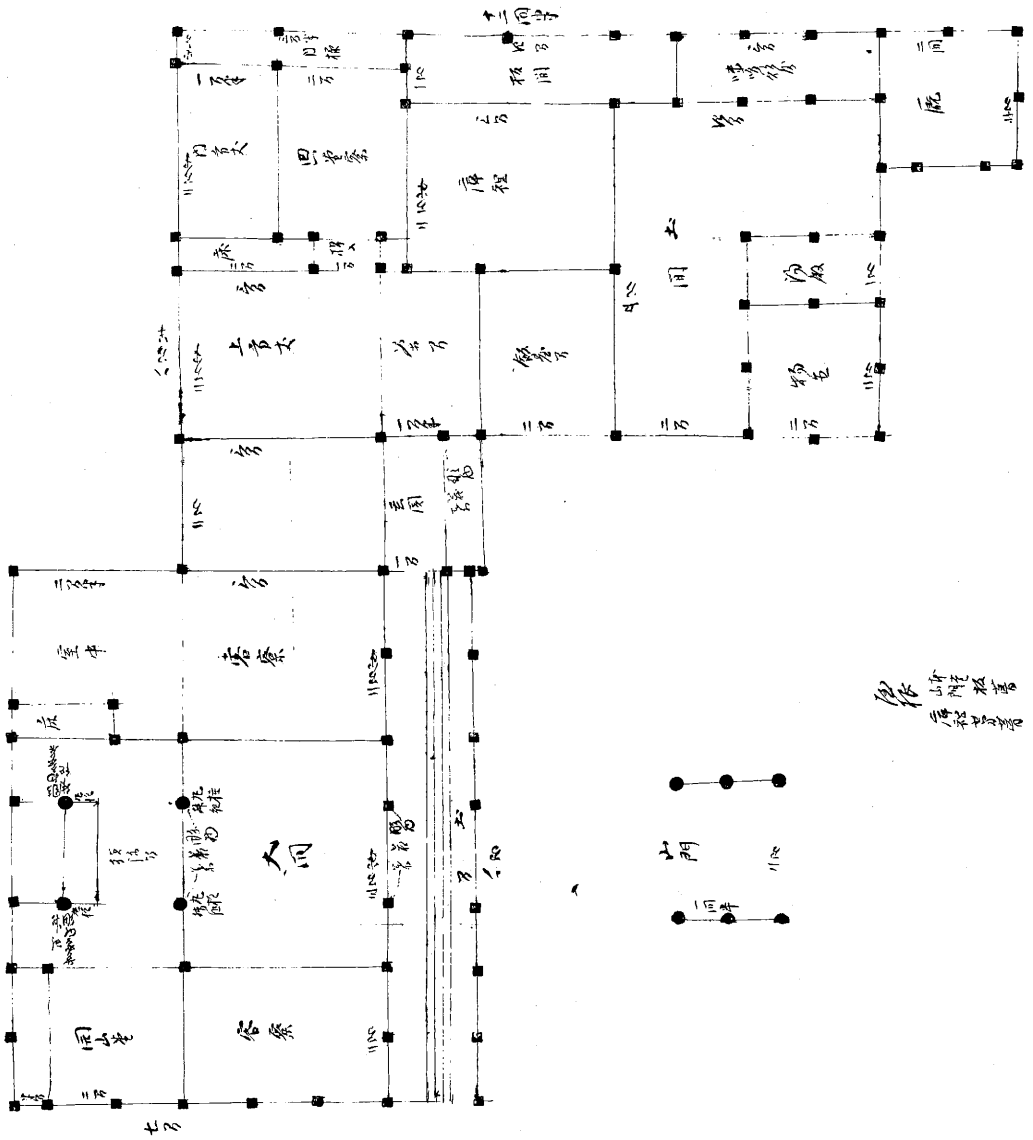


第20图 柱迹痕（礎石迹）实测图



第21図 出土遺物

長尾組榎村龍峰寺燒失跡礎墨引



御指
山門
庫裏
客寮

礎墨引

第22圖 長尾組榎村龍峰寺燒失跡礎墨引 (明治元年)

第4章 三角原遺跡範囲確認調査

1 調査位置

A地点 三郷村大字温6691番地

B地点 三郷村大字温6664番地

2 調査期間

平成15年10月8日(水)～平成15年10月9日(木)

3 調査参加者

調査指導員：山田瑞穂

調査員：福嶋 嗣・赤羽根嘉矩・曾根原孝和・丸山善太郎・那須野雅好

4 調査の目的と方法

長野県埋蔵文化財センターによる三角原遺跡発掘調査で、平安期の竪穴住居址が50軒以上調査され、大きな集落の一端を露呈して、集落の南限と東限はほぼ確認されたものと考えられる。しかしこの調査結果から集落は更に西方と北方に広がるものとみられるので、その範囲を確認するため試掘調査を実施することにした。

調査はトレンチを重機で掘り下げ、遺構・遺物の存否と土層の状況を確認することにする。

この調査に関しては、長野県埋蔵文化財センター廣田和穂氏から指導・助言を得た。

5 調査地付近の地質

住吉神社の西方に当たるこの周辺は黒沢川の末端にあたり、現在では堀廻堰と黒沢川は合流しているが、黒沢川の護岸が整備される以前は、黒沢川の氾濫で悩まされた地区である。またこの付近は黒沢川扇状地の扇端部分にあたり、住吉神社に西接する商業施設が建設されたとき観察されたように、最近でも何回かの氾濫がみられた場所である。

黒沢川の洪水対策の一環として、大型の排水路建設が国の事業として行われ、その事業に先だって埋蔵文化財発掘調査が実施された。三郷村では数少ない平安時代の集落遺跡で、その細部は長野県埋蔵文化財センターの報告書によるが、この調査の最後に見られた洪水の跡について述べたい。

第24図では平安時代の遺跡を切って砂礫層が流れた跡を示しているのが見られる。この砂礫をもたらした洪水は矢印の方向に流れていた時もあったと思われるが、洪水時に見られる乱流の跡の可能性もある。

土層は厚い耕土の下に黒色バンド層があり平安時代の地表を示している。その上の層も砂礫を挟み、水の流れが一様でなかったことを示す。また、その下の厚い砂礫層は平安時代前の洪水の跡を示すものと思われる。それはこの砂礫層の大部分は黒沢川の礫にも関わらず、この中に安山岩の礫が含まれており、この礫は梓川からもたらされた物だからである。

6 A地点の調査結果

南北に設定したA、Bのトレンチから遺構の確認及び遺物出土があった。土層は耕作土である黒褐色土が約40cm、茶褐色土が約30～40cm、ローム土が約10cmで砂利層に続くのが一般的層序であり、地表からローム上面までは70～80cmで、ほぼ平坦面を形成しており安定した土地であったように観察された。しかし自然流の流路もあり、一時的に川が存在したことも把握し得た。

(1) Aトレンチ

幅2m、長さ100mで設定し、竪穴住居址1、土坑1、柱状ピット4、自然流痕を確認した。

竪穴住居址 南壁の掘り込み30cmで床面になり固くしまった床面が北へ続く。住居址北部は南壁から2.8mのところまで自然流によって破壊されており全貌不明の住居址となっている。床面直上より土師器の高台付椀の底部片（第25図1）と坏底部片（第25図2）の出土があった。共に内面黒色土器で平安期末に比定されるものであることから本住居址の時期もそこに求められる。自然流はそれ以降ということになる。

土坑 南北（短径）120cm、東西（長径）150cm以上の楕円形を呈し、深さ60cmを測る。黒褐色土が充満しており、中に炭化物の混入がみられた。出土遺物なし。

柱状ピット 柱状ピットは次のP1～P4を確認したが出土遺物はなく、いかなる穴かつかめなかった。P1は径40cm、深さ30cm、円形を呈する。P2は径50cm、深さ20cm、円形を呈する。P3は径30cm、深さ20cm、円形を呈する。P4径45cm、深さ20cm、円形を呈する。

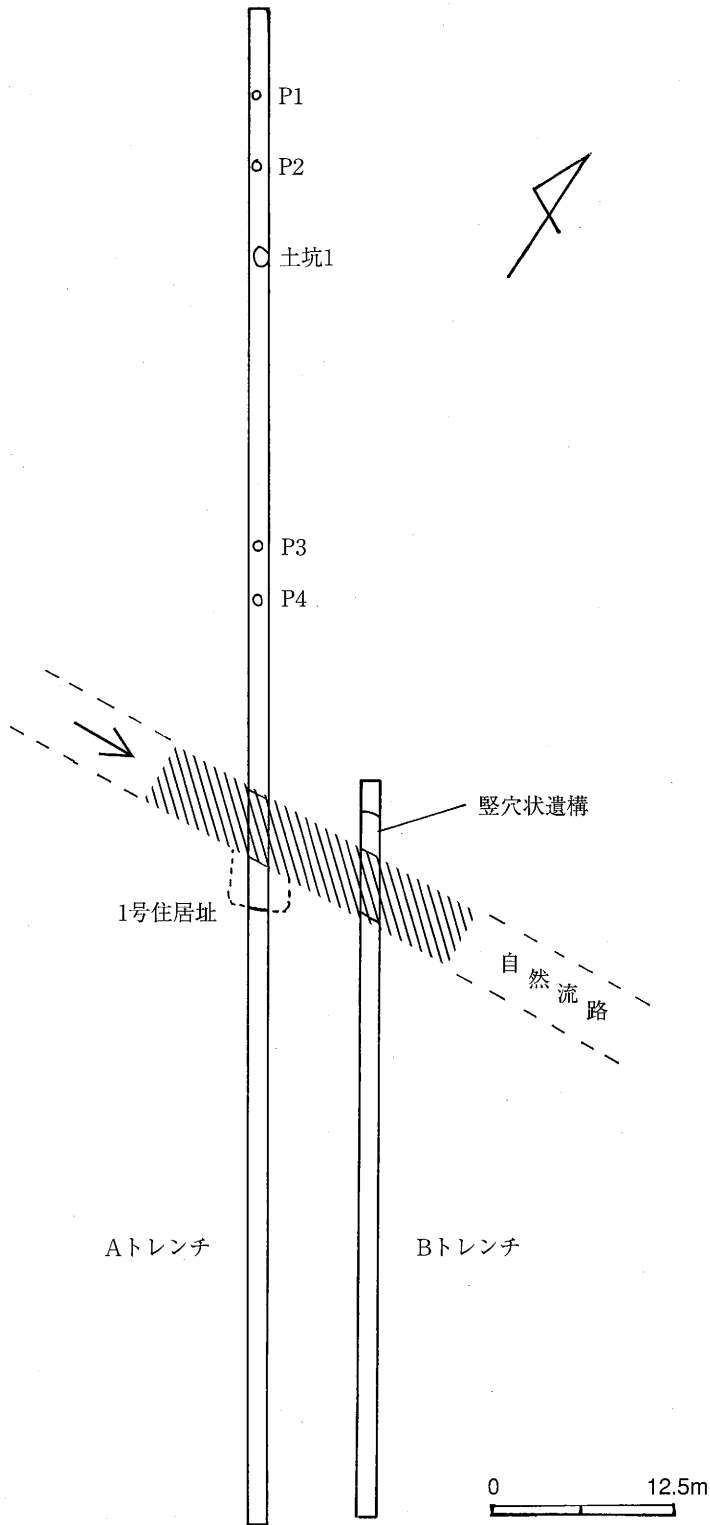
自然流痕 平安期末の竪穴住居址を押し流した姿でみられ、川幅は約4.9mほどである。

(2) Bトレンチ

幅2m、長さ50mで設定し、炭化物堆積の竪穴状遺構1箇所と自然流痕が確認された。

炭化物堆積の竪穴状遺構 茶褐色で土層下部からローム層へかけて北壁20cmほどの掘り込みがみられ、やや凹凸のみられる床面が南へ2.4m続く。南部は自然流によって破壊されている。床面はローム混じりの砂礫で堅緻とはいえないが、やや堅い面をもち、その上に細かい炭化物混入層が約20cm堆積している。調査トレンチ内で材質鑑定資料とするような炭化物はみられず、炭化灰が混じって黒色土となったもののように観察された。

出土遺物はないが、故意に割ったと思われる安山岩が十数個出土した。黒沢川流域に



第24図 A地点遺構配置図

安山岩はないとのことだから梓川系の安山岩になろう。

床面状のものは2.4mほどが検出されただけであり、規模、形状等不明のためその性格も不明といわざるを得ないが、炭窯的なものであろうか。自然流によって破壊されていることは、先記住居址と同内容であり、所属時期は川の氾濫以前ということにとどめておきたい。おそらく平安期のものであろう。

自然流痕 炭化物堆積の竪穴状遺構の南部を切って西から東へ流れており、川幅約4.3mを測る。Aトレンチの自然流痕へ続くものである。

(3) 小結

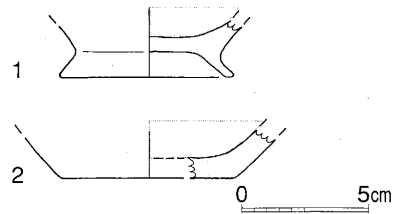
幅狭い2本のトレンチだけの調査にもかかわらず、竪穴住居址1、炭化物堆積の竪穴状遺構1、土坑1、柱穴状ピット4の検出をみたことは、三角原遺跡の西方への更なる拡がりを確認したこととなり大きな試掘成果といえる。

7 B地点の調査結果

B地点では幅2mのトレンチを南北に70m設定し、重機で掘り下げたが遺構・遺物の検出には至らなかった。土層は耕作土（黒褐色土）約30cmでローム土約25cmに続き以下砂礫層となるのが一般的な層序であり、トレンチ北方、畑の北境界より16m辺から境界にかけて砂礫の堆積がみられ、自然流の氾濫が観察された。

本トレンチでみる限り、三角原遺跡の集落はこの地点まで拡がっていないものと考えられる。

(山田瑞穂)



第25図 A地点出土土器

第5章 三角原遺跡試掘調査（あづみ野排水路）

1 調査位置

三郷村大字温 あづみ野排水路建設地

2 調査期間

平成15年11月12日(水)～平成15年11月13日(木)

3 調査参加者

調査指導員：山田瑞穂

調査員：那須野雅好・中田育成・木船 清

4 調査の目的と方法

長野県埋蔵文化財センターによって実施された三角原遺跡発掘調査で、平安期の竪穴住居址が50軒余確認されて集落規模の大きさを示してくれた。この集落の人々の生活を支えた生産活動の場も関心の的で、とりわけ水田耕作地の所在が問題視される。集落は黒沢川末の扇端部の河岸段丘上に営まれており、その北方は段丘下に平坦な沖積地が続くところであり、水田址の存在が予想される地である。その存否の確認と更に平安期集落の北方への拡がりや遺物の出土等を含め試掘調査を排水路建設に関わる各建設会社の協力を得て実施することにした。

調査は水路予定地内にトレンチを設定し、重機による掘り下げを行なって、遺構・遺物の存否と土層状況の把握に努めることにした。

5 調査結果

水路予定地内に第26図のように14箇所にとレンチ（T1～T13）を設定して調査を実施したが、どのトレンチからも何ら遺構の確認はなく、遺物の出土もなかった。土層は地点毎に違いがあり、大きく三様相の観察ができた。即ちその1はT1とT2、その2はT3～T8、その3はT9～T13である。

その1は黒沢川扇状地最末端の河岸段丘沿いにあたる場所で、平安期集落が北方へ続くか注目されたが、既に圃場整備等の工事が実施された地であるため、原地形が削平されて変貌していることが判明した。

T1は仮水路設定地に弧状に設けた2m幅のトレンチである。水田耕作土25cmの下は茶褐色砂礫層となり、西・南の地続きの原地形からみて、明らかに土取りが行なわれた水田である。道路をはさんだ南隣りからは平安期竪穴住居址が検出されており、土取り

以前にはその存在が推察されるところである。

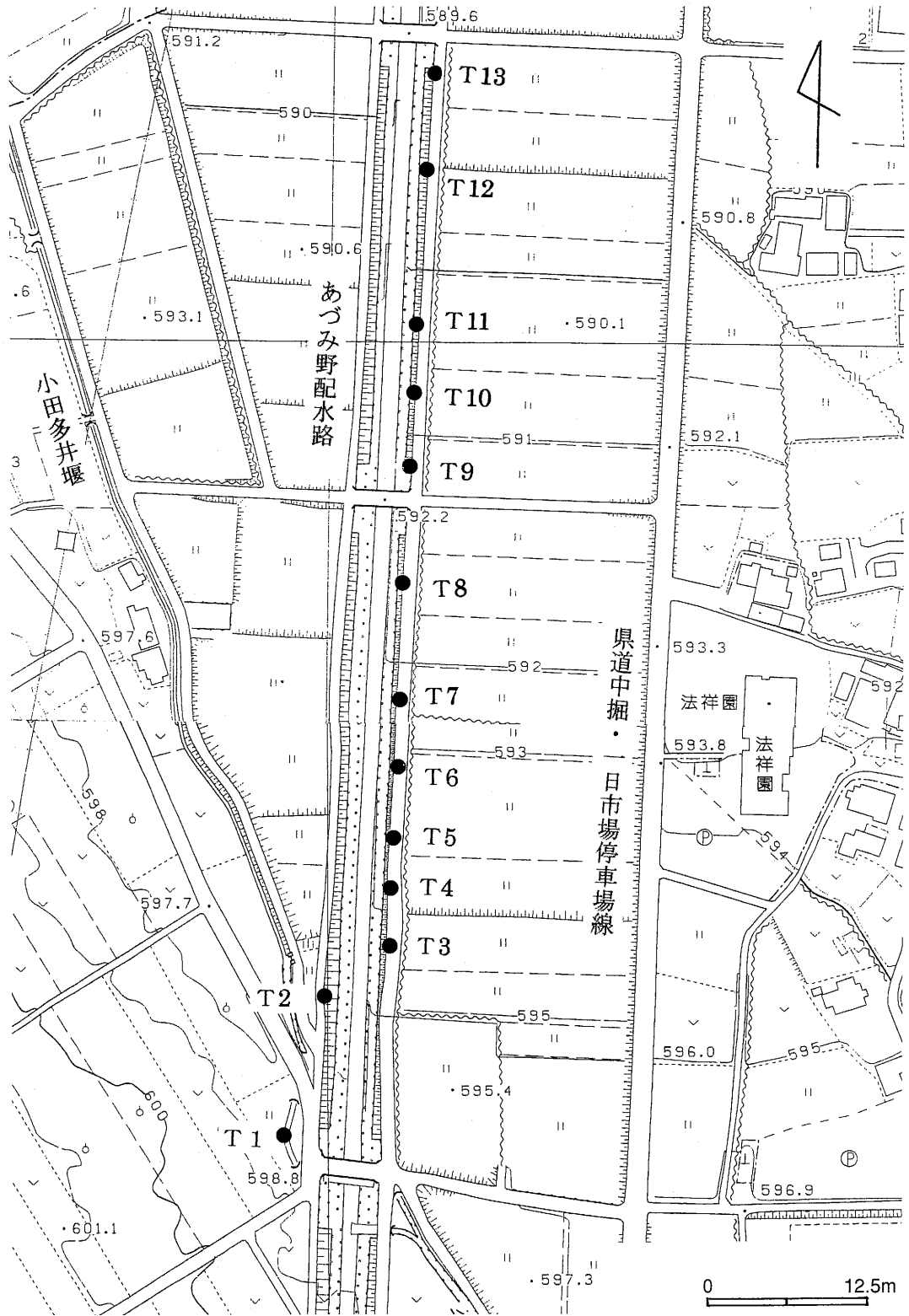
T2は河岸段丘最縁辺部の水田に設けたもので、土層は水田耕作土20～25cm、黒褐色砂礫層15cm、黄褐色粘土層30cmで茶褐色砂礫層へと続いている。上層の黒褐色砂礫層は水田造成の際に地ならしされたもので、トレンチ南部にはコンクリートや瓦、缶の投げ込みがみられた。

その2は河岸段丘下の水田地で、黒沢川の押し出した砂礫が明確に観察される場所である。水田耕作土の下に暗茶褐色の砂礫土が更にその下には暗茶褐色粘土層と同色砂礫層が続くというのが一般的層序で、1.7mの間に2回の押し出しを確認できる。掘り下げ面や断面にも水田址等の存在は認められず、一片の遺物出土もなかった。

その3は水田耕作土の下に黄褐色粘土層が40～70cm堆積し、その下に氾濫を示す黒褐色の砂層、更に茶褐色粘土層と交互にみられ、1.9mまでの間に3回に及ぶ氾濫が観察できた。粘土の堆積が示すように川の流れがよどむ地点で水田耕作可能な地と考えられる。掘り下げ面や断面には水田址等はみられず、遺物の出土もなかった。この東方周辺が水田地として好適ではなかったかと推察される地である。

以上、今回の試掘では何ら遺構および遺物の確認はなかったが、三角原遺跡の平安期集落の北東方向への拡がりはおおむね把握できた。また、水田址を探る上で沖積地に厚い粘土層をもつ地域のあることを知り得たことは大きな成果といえよう。

(山田瑞穂)



第26図 試掘トレンチ配置図

第6章 三角原遺跡Ⅱ次発掘調査

1 調査位置

三郷村大字温6671番地(市町村合併により平成17年10月1日から安曇野市三郷温6671番地)

2 調査期間

平成17年9月29日(木)～平成17年10月2日(日)

3 調査参加者

調査指導員：今村 克

4 調査の経過

平成17年9月、三郷村に農業用倉庫建設の申請があった。申請地は三角原遺跡内にあり、なおかつ平成15年に長野県埋蔵文化財センターによって大規模な発掘調査が行われた地点から北西へ30mしか離れていない場所であることから、試掘調査を行うことにした。その結果、平安時代の遺物と同時代の遺構を検出した。そのため急遽、三郷村教育委員会と事業者で埋蔵文化財保護協議を実施した結果、発掘調査を実施することになった。

5 調査の結果

約160㎡を調査し、平安時代の住居址2軒、土坑2、ピット4を検出・調査した。今回調査した遺構は先述のとおり長野県埋蔵文化財センターが調査した集落の一部と考えられる。このため遺構の記述、時期の段階設定については野県埋蔵文化財センターによる発掘調査報告書(長野県埋蔵文化財センター2005)の分類基準・時代観に基づくものとした。

(1) 第1号住居址

調査区中央部に位置し、ほぼ全体を調査できた。

規模・形状 長軸5m×短軸4.5mでやや縦長の隅丸方形を呈する。床面積は22.5㎡で、I類に分類される大型住居址である。

床面 カマド周辺と北東部に固くたたきしめられた部分がある。

カマド 北西壁中央にある。粘土質の土で構築された両袖を検出した。カマド内覆土は、住居址と同一のI層と焼土・炭化物を多く含むII層とに分かれる。II層は厚さ5～10cmを測る。

柱穴 住居址には11のピットが検出されたが、位置や深さから支柱穴の可能性のあるピットはP1～P3と考えた。深さは、P1が19cm、P2が12cm、P3が13cmを測る。覆土は大

きく2層に分けられる。I層は1～3cmの小礫を多量に含み自然堆積と考えられる。II層の中～上面には、小～中礫が土器片とともに一部まとまっているのが確認された。

遺物 第1号住居址からは黒色土器坏、灰釉陶器椀、土師器甕が出土している。このうち黒色土器坏（第32図1～4）および土師器小型甕は、住居址の壁際床面上からの出土で残存部も多い。住居址埋没の初期段階の遺物と考えられる。住居址中央東部と南西部では、こぶし大の礫と土器片が集中して出土している。灰釉陶器椀の破片もこの中に含まれる。埋没の第二段階に破棄されたものと思われる。

住居址の年代 遺物・住居址の形態からこの竪穴住居の帰属時期は三角原遺跡第I段階（9世紀中葉）～第II段階（9世後葉～10世紀前葉）に位置づけられる。

(2) 第2号住居址

調査区北部にある。遺構の大半は調査区外にあるため、規模・形状は不明である。

床面 黄色土ローム上面を均質にならして床面としている。

カマド 未検出である。

柱穴 ピットを1箇所検出したが、柱穴になるかは不明である。

遺物 住居址床面から黒色土器椀、土師器小型甕が出土している。黒色土器椀（第32図6）はこぶし大の礫が上に乗った状態で出土している。同じく黒色土器椀（第32図7）は上から押しつぶされたような状態で床面上に広がっていた。小型甕（第32図8）は胴部上半が欠けているが正位で出土している。灰釉陶器椀の破片は床面から若干浮いた位置からの出土である。

住居址の年代 本住居址の時期は三角原遺跡第II段階（9世後葉～10世紀前葉）に位置づけられようか。

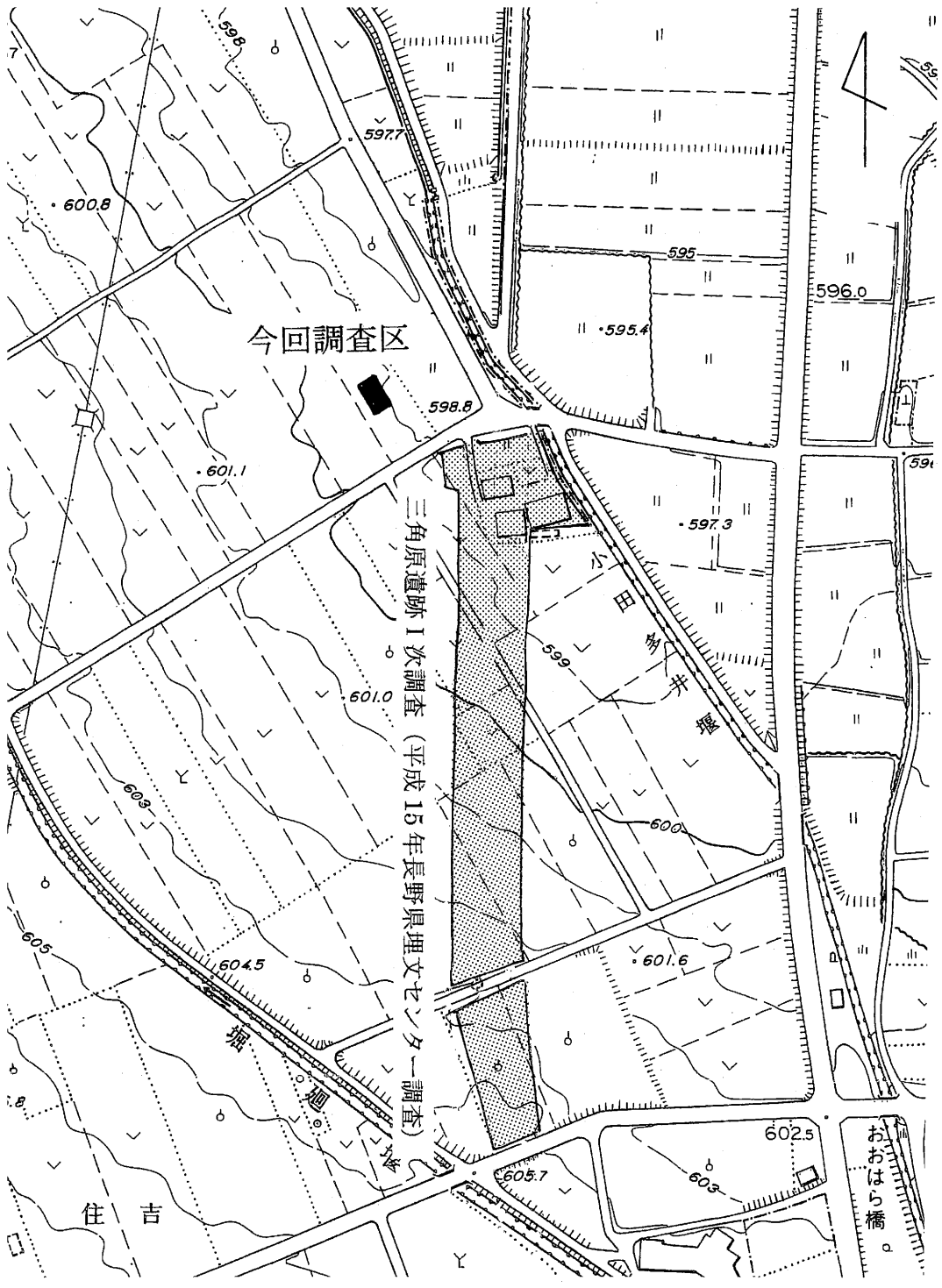
(3) その他

特記すべき遺物として墨書土器片と砥石が挙げられる。墨書土器（第32図9～11）は、いずれも第1号住居址覆土中からの出土である。遺物整理作業中に確認できた。ただし小片であるので、墨書が文字であるか記号なのか全体の解明はできていない。次に砥石であるが、荒砥と仕上砥が1個ずつ出土している。荒砥（第32図12）は、第1号住居址東側の中礫がまとまって出土した地点と同じく、西側カマド寄りの場所の覆土中から別々に出土したものが接合した。仕上砥（第32図13）は第1号住居址検出段階で確認された。

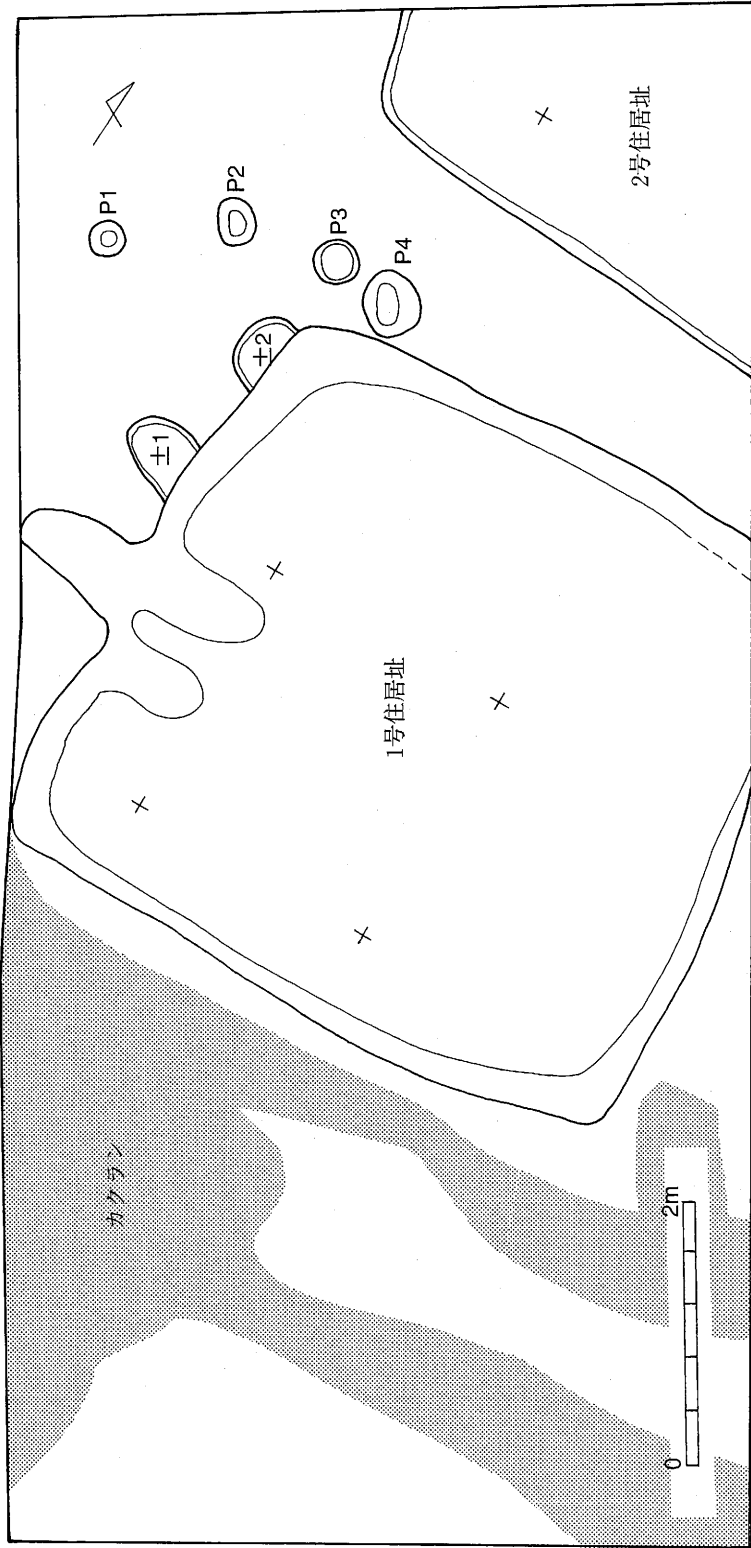
（今村 克）

参考文献

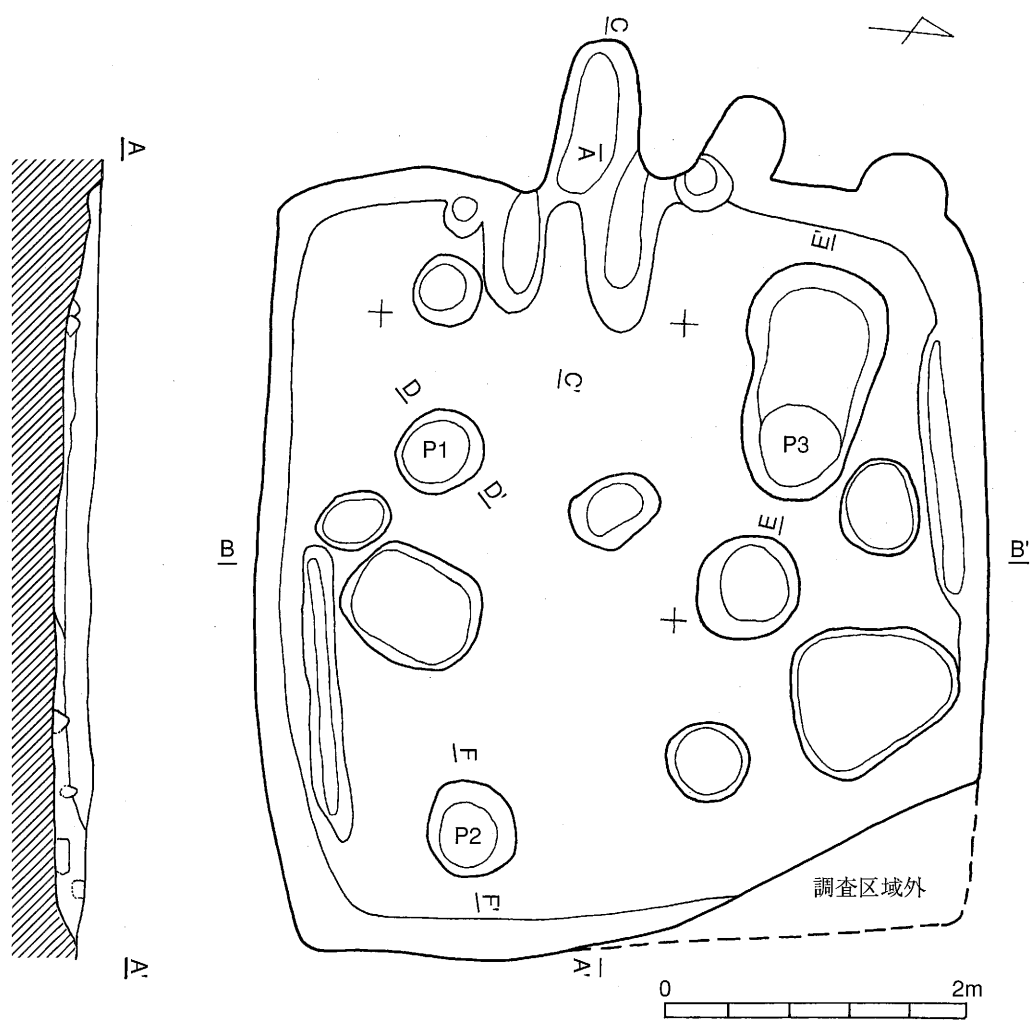
長野県埋蔵文化財センター 2005『安曇野農業水利事業あづみ野排水路埋蔵文化財発掘調査報告書—三角原遺跡—』農林水産省関東農政局安曇野農業水利事業所・長野県埋蔵文化財センター



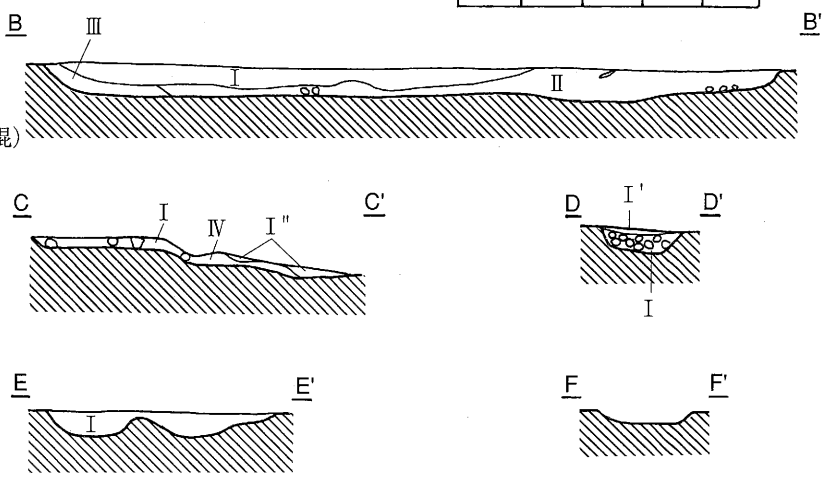
第27図 調査位置図



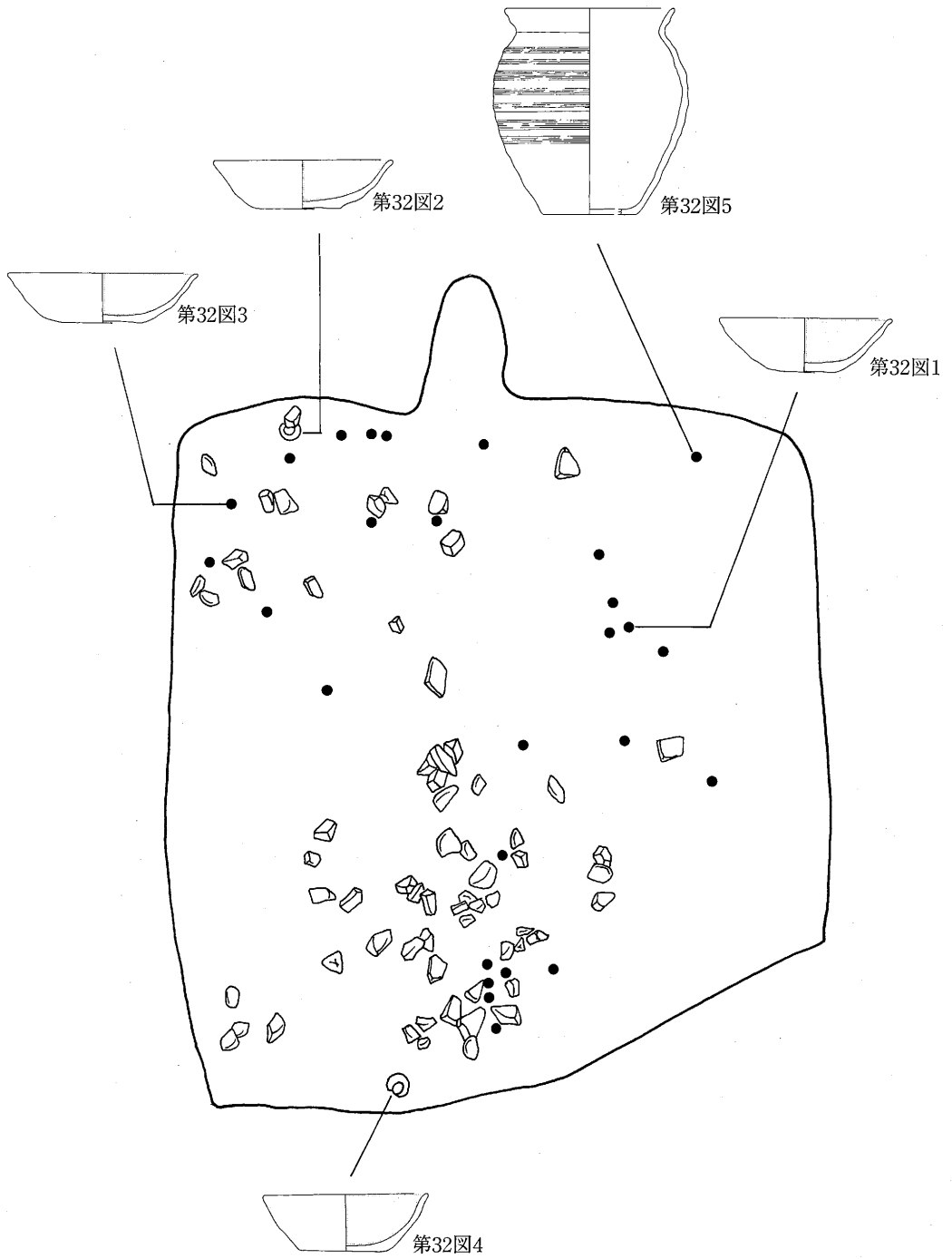
第28図 遺構配置図



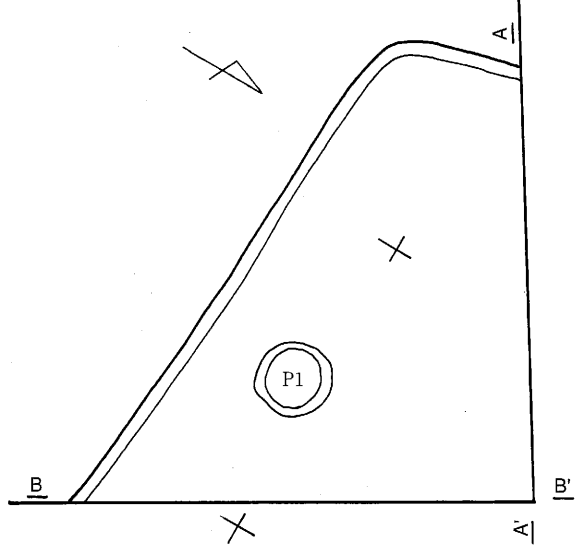
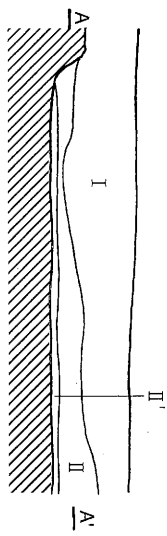
- I : 暗褐色土 (1~3φ 礫多)
- I' : 暗褐色土
(焼土、黄色土ローム粒混)
- I'' : 暗褐色土 (礫少量)
- II : 褐色土 (礫少量)
- III : 黒褐色土
- IV : 焼土



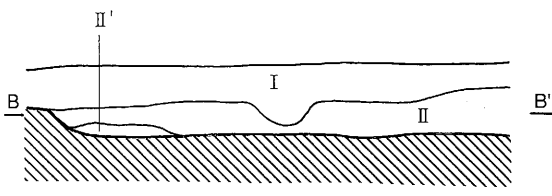
第29図 第1号住居址



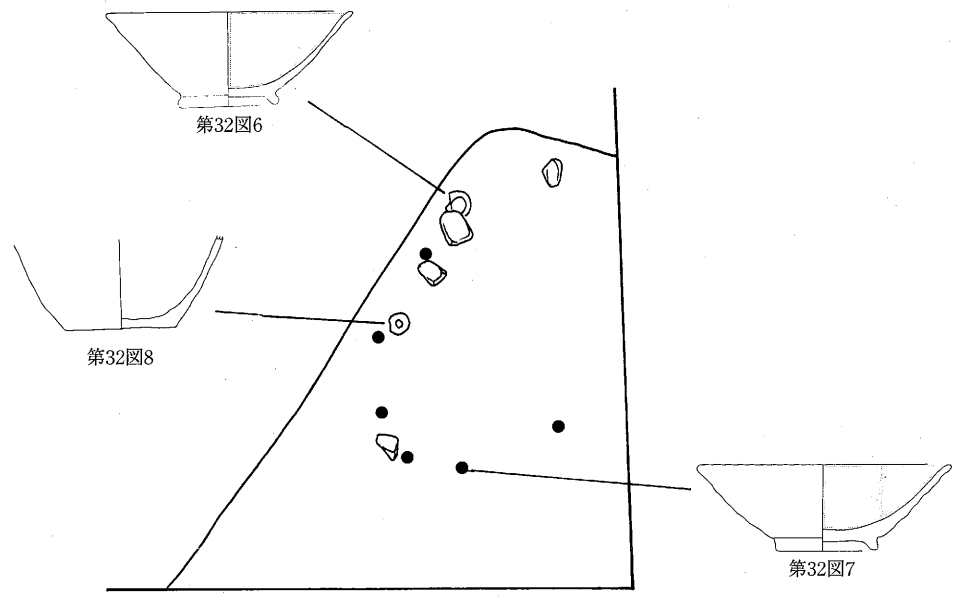
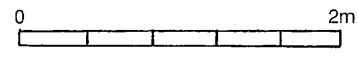
第30图 第1号住居址遺物出土状況



- I : 褐色土 (3~5φ礫多)
- II : 暗褐色土 (粒子細かく礫含まない)
- III : 暗褐色土 (黄色土混入)

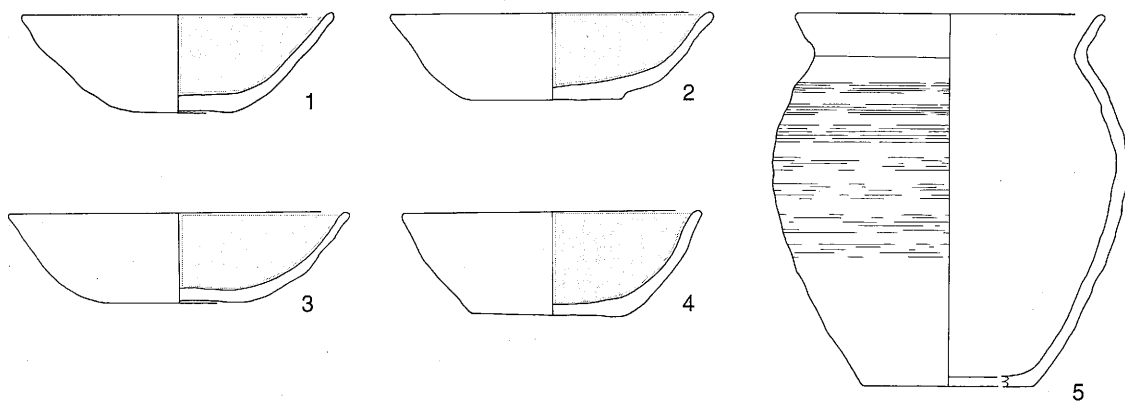


遺物出土図

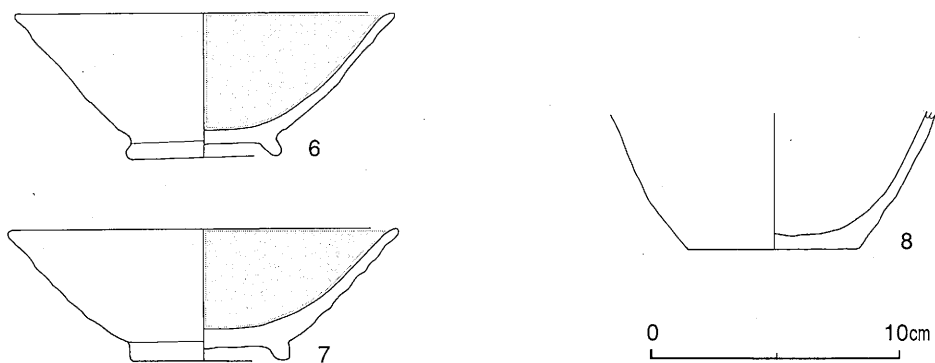


第31図 第2号住居址

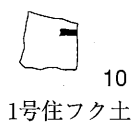
1号住居址



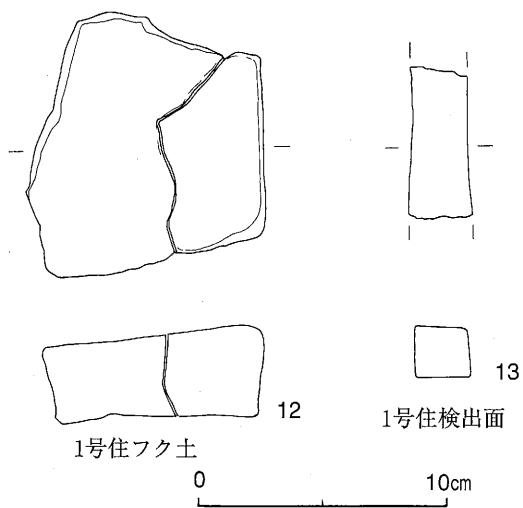
2号住居址



墨書土器



砥石



第32図 出土遺物

第7章 栗の木下遺跡試掘調査

1 調査位置

三郷村大字温2180番地1、2183番地1、2194番地1、2195番地2

2 調査日

平成15年12月1日(月)

3 調査参加者

調査指導員：山田瑞穂

調査員：那須野雅好・中田育成・有沢芳明・三枝由美・松岡信之

4 調査の目的と方法

栗の木下遺跡は、周知の埋蔵文化財包蔵地であり、平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器および中世の内耳土器、青銅製品、仏供具等の出土がある。本遺跡は中村太郎氏(故人)等によって遺物の採集が行われ、早くから注目されていた遺跡であり、昭和62年圃場整備事業に伴う試掘調査の際、3軒の平安時代の竪穴住居址の存在が確認されて集落の一端が把握された。

この度、土地所有者による住宅建設が本遺跡範囲内で予定されて埋蔵文化財保護協議を実施するに至った。開発予定地である水田は、昭和62年に発見された竪穴住居址とは小田多井堰を挟んで東南隣りに位置する。この場所は該期集落の拡がりを知る上でも重要な地であるため試掘調査を実施した。

調査は開発予定地に南北方向のトレンチを設定し、重機による掘り下げを行なって遺構・遺物の状況把握をすることにした。試掘溝は第33図のように西からAT~FTとし黒沢川の氾濫等土層観察にも努めることにした。

5 調査の結果

(1) 土壌

竪穴住居址の確認はなかったが灰釉陶器をもつ土壌が検出されて平安期集落の範囲内であることが把握できた。土壌はCトレンチ中ほどで確認された4基で、密集して構築されていた。

土壌1 (第34図1) 楕円形を呈する東西120cm、南北80cmの大きさで、礫を含む黒褐色土層下部から茶褐色砂礫層に掘り込みが見られた。確認した深さは15cmである。北壁から灰釉陶器皿(第35図1)の完形品、中ほどから灰釉陶器碗と広口壺の破片(第35図

2、3)の出土があった。皿と椀は伏せた状態で高台部を上になっている。

土壙 2 (第34図 2) 土壙 1の南に接しており、ほぼ円形に近い東西90cm、南北75cmの規模で深さ15cmを測る。上面に焼けた石3個と焼土が1～2cmほどみられた。しかし他の石および土壙内部は被熱しておらず、焼け石を覆土上にのせたのか疑問の残る焼土である。上面中央辺より焼土と共に灰釉陶器椀が2個(第35図 4、5)いずれも完形品ではないものが出土した。土壙 1と同様に伏せた状態であり意図的なものを感じられる。

土壙 3 (第34図 3) 土壙 2、3、4と並んだ真中に位置するもので、円形を呈し、東西95cm、南北85cmの大きさである。最初からプランがよく判明せず検出に苦勞したが、出土遺物からして確認掘り込みは10cm程となった。出土遺物は土師器坏(第35図 6～8)、椀(同 9、10)、須恵器大甕片(同12)、灰釉陶器壺底部片(同11)、不明鉄製品(同13)がある。図示していないが土師器小型甕の口縁部も出土しており推定口径14cmである。6の坏は口縁部が欠ける程度であるが他はすべて小破片であり完形品はない。土師器、須恵器、不明鉄製品と量的にも多く土壙 1、2と若干異なる。

土壙 4 (第34図 4) 土壙 3の面に接して掘られたもので東西90cm、南北80cmの円形プランで掘り込みも5cmと浅い確認となった。出土遺物はない。

(2) 考察

確認された4基の土壙について若干の考察を加えておきたい。

出土遺物の土師器坏・椀・小型甕、灰釉陶器皿・椀は10世紀前半から中頃に位置づけられるものである。特に灰釉陶器の多くは東濃窯で焼かれたものであり、2・4・5は大原2号、1の皿は虎溪山1号、3の広口壺は猿投窯のものとのことである¹。これら出土遺物から土壙の時期も虎溪山1号以降、即ち10世紀後半に比定できよう。

次に土壙の性格であるが、墓に類するものと考え「土坑」ではなく「土壙」とした。土壙墓としては規模が小さく、火葬墓としては焼けた痕跡がなく悩むところであるが、土壙 2の焼土と焼け石の存在を考慮して再葬的なものかと考え類例の検討を待ちたい。この時期は墓所が集落内に営まれることから、集落範囲に含まれるこれら土壙が特殊事情をもった家族の墓とも推察されよう。

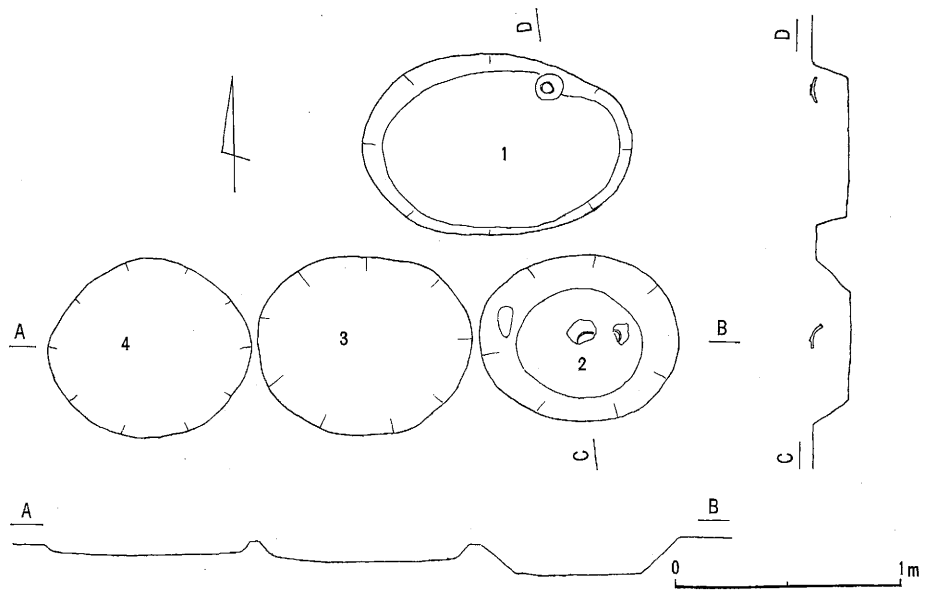
最後に土層について記す。基本的には水田耕作土(30cm)、黒褐色及び茶褐色の砂礫層(30～70cm)、茶褐色の砂質粘土層(10～30cm)、砂礫層と続く土層であるが各トレンチおよびトレンチの南と北とでは若干の違いがみられる。黒沢川の氾濫によるもので西のAトレンチと東のFトレンチでは礫の大きさに相当の差があり、東へ移行するにつれて礫は小さくなっている。土壙は黒褐色土砂礫層下部から茶褐色砂礫層に構築されていた。Aトレンチでは南から中ほどにかけて瓦片の存在と炭化物の入った黒色土層がみられて自然の堆積状況ではないことが観察された。

(山田瑞穂)

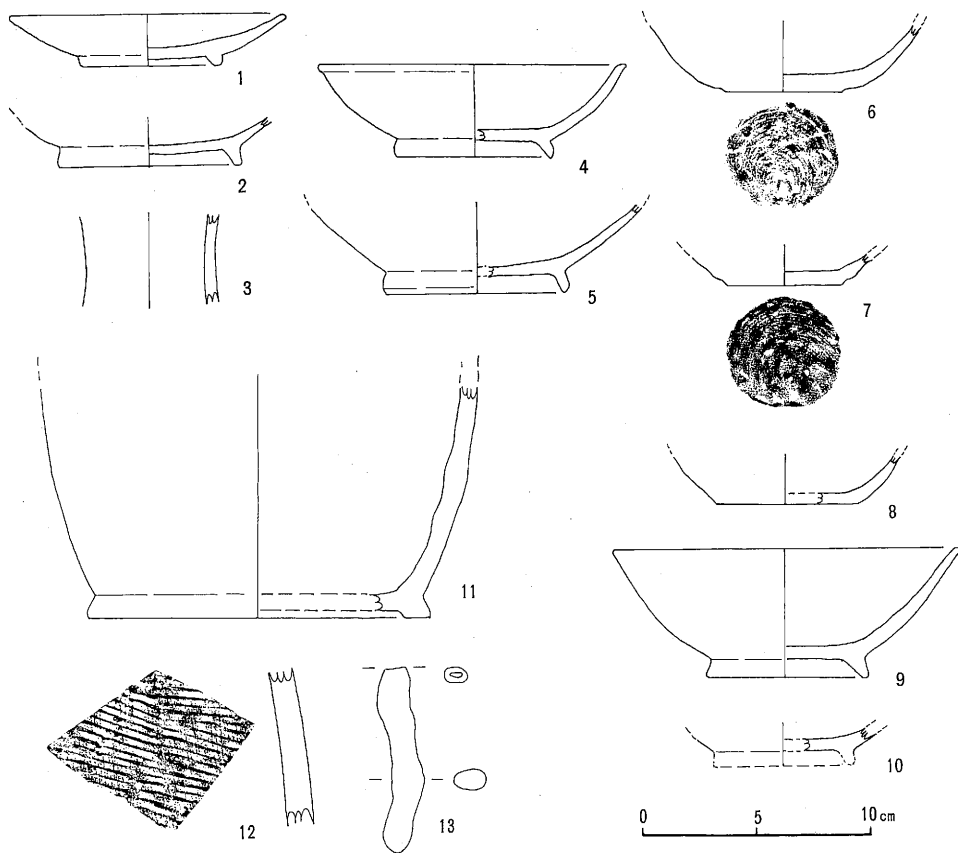
¹ 市川隆之(県埋文センター)、百瀬新治(県立歴史館)の両氏よりご教示を受けた。



第33図 トレンチ配置図



第34图 土壤实测图



第35图 遗物实测图

第8章 栗の木下遺跡

『三郷村の埋蔵文化財（資料編）』追記

平成11年12月発刊の『三郷村埋蔵文化財（資料集）』の33ページに栗の木下遺跡についての記載がある。「4. 遺構・遺物」の説明に「昭和62年11月、圃場整備事業のため試掘確認調査を実施したが、この時には堰西側の水田より平安期の竪穴住居址が3軒確認されている。」と記述されているのみで遺物についての記載は何もない。

今回その際の出土遺物の実測図作成ができたので、以下それについて記しておく。

1 第1号住居址出土遺物

第36図に示した土師器（1～5）、須恵器（12）、灰釉陶器（6～11）、磁器（13）がある。いずれも破片で器形の判明するものは、5の土師器の高台付皿のみである。

1と2は坏の底部片で推定底径5～6cmとなる。3と4は高台付椀と思われる底部片で底径8cm程であり、内面黒色となっている。5の皿は口径13.6cm、底径7cm、高さ3cmを測り、内面黒色が施されている。外面はややざらついた感じで灰白色を呈している。灰釉陶器6、7は椀の口縁部片と底部片で推定口径15～16cm程になろう。7の高台は剥落しているが底径7cmくらいが推測される。8は皿の口縁部片、9～11は椀か皿の底部片である。12は須恵器大甕の胴部片で胎土、焼成共によく堅い焼きとなっている。成形時の圧痕が器内面にもみられる。13は青磁の皿で、釉薬は淡い水色が均一にかかっており、内面に緑色の草花と思われる絵柄がある。推定口径13cm、底径8cm、器高2.5cm程の皿である。この皿は土師器、須恵器、灰釉陶器とは時間差があるものである。前回の資料集に記した乗燭（ひょうそく）、灯明皿、獅子頭等18世紀代および以降のものと同時期の所産で本址への紛れ込み品である。

遺物から本址は平安後期に位置づくものである。

2 第2号住居址出土遺物

第37図に示した土師器（14～26）、須恵器（27、28）、灰釉陶器（29、30）、不明鉄製品（31、32）がある。いずれも破片で器形の判明するものは、20以外にない。

14～19は一応坏の器形をとるものとした。14は推定口径14cm、15は11cm程と思われる。底径は約6cmを測るが18はそれよりやや小さい。20～25は椀器形をとるものと思われ、20は口径18cm、底径7cm、器高5cmである。他は口縁部や底部片であるが、20と同じような数値を示すものと考えられる。21、25には内面黒色処理が施されている。26は甕の底部片で径8cm、内外にロクロ成形痕が残るもので胎土、焼成ともによく内外面明褐色をしている。以上土師器について記したが、いずれもロクロ成形によるもので糸切痕が残っている。27は須恵器長頸瓶の頸部片で推定径4cm程であり、口径は7.5cmくらいに

なろうか。胎土、焼成ともよく堅い焼きで、外面灰黒色、内面灰色を呈している。28は坏の底部片で推定底径6cm程になる。胎土はよいが焼成は軟らかい感じである。器内面に赤褐色の顔料付着があり特筆される。糸切痕がある。29、30は灰釉陶器の椀の底部片である。底径8cm程であるが、両者の高台のつくりには若干の差異がみられるし、胎土に29は小石が見られる。内面の釉薬は共にざらついた感じがする。31、32は不明鉄片である。3～5cm程の薄い細片で劣化が激しく、ぼろぼろして剥げる。同一個体と思われるものであり、31には折り返しが施されている。

遺物から本址も平安後期に位置づけられよう。

3 第3号住居址出土遺物

第37図に示した土師器(33、34)、灰釉陶器(35)がある。共に破片で器形は不明である。

33は甕の口縁部片で推定口径17cm程になろう。胎土、焼成共によくて黒褐色を呈し、器内外面にロクロ成形痕が残っている。34は坏の底部片で糸切痕が残っている。底径6cm程である。35は灰釉陶器椀の底部片で底径7.5cm程のものである。灰白色を呈し焼成がよい。内外面に汁状のものを垂らしたかのように黒褐色の付着物がみられる。

出土遺物は少ないが、第1号および第2号住居址と同じ内容であることから、本址も平安後期に位置づけられる。

4 小結

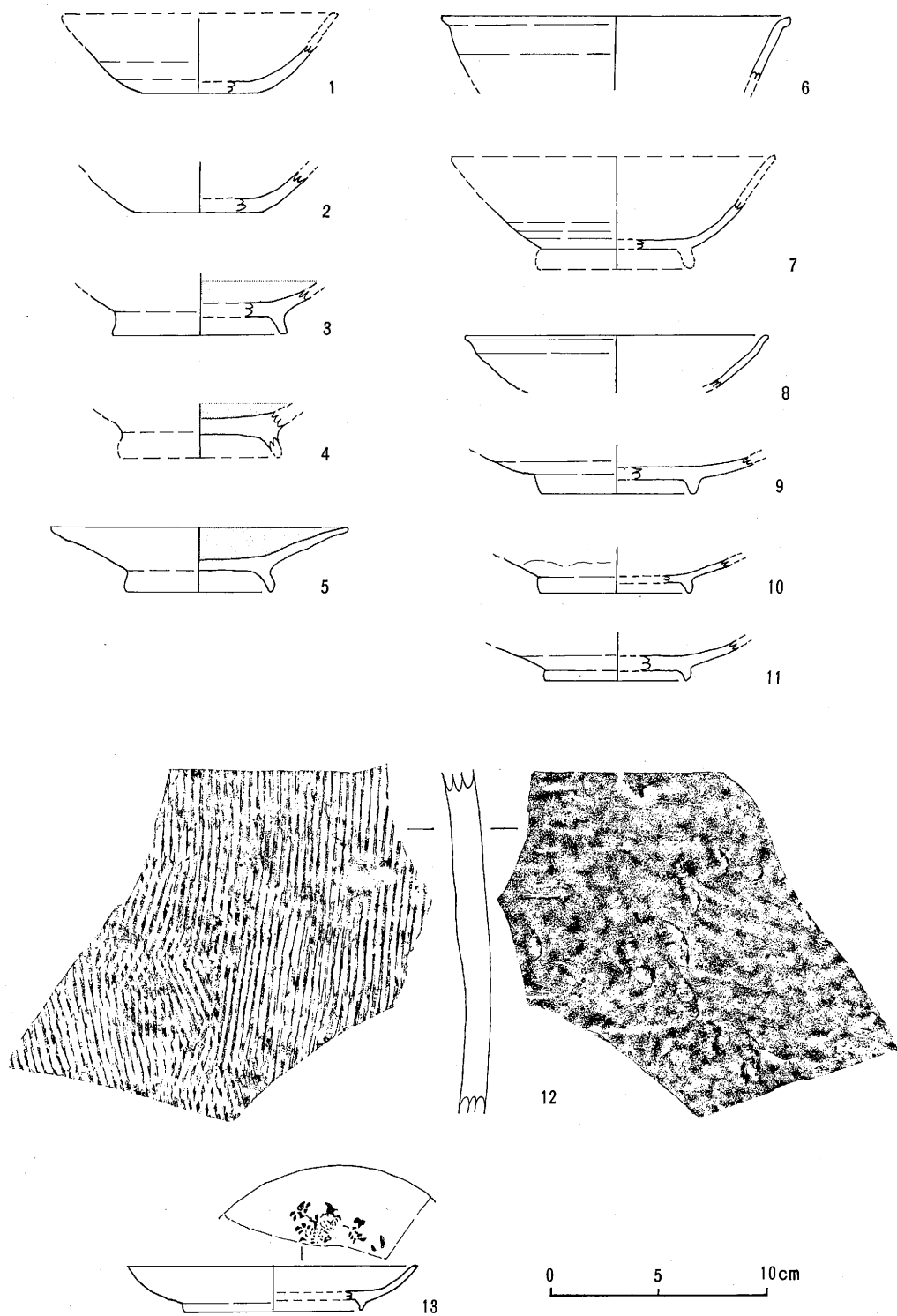
以上3つの住居址の出土遺物について記したが、各住居址の遺物に時間差はみられず、遺物からは同時期に所在していた遺構と考えられる。

土師器はすべてロクロ成形によるものであり、底面には糸切痕を残し、高台の付くものはその上に付高台を施している。胎土に小石を含む22や茶褐色の混入物のみられる2、17があるが、多くの胎土・焼成は一般的なもので明褐色ないし茶褐色を示している。今回示した土師器は、坏・椀・皿・甕の器種があるが高台付の椀が量的には多く、甕が少ない。

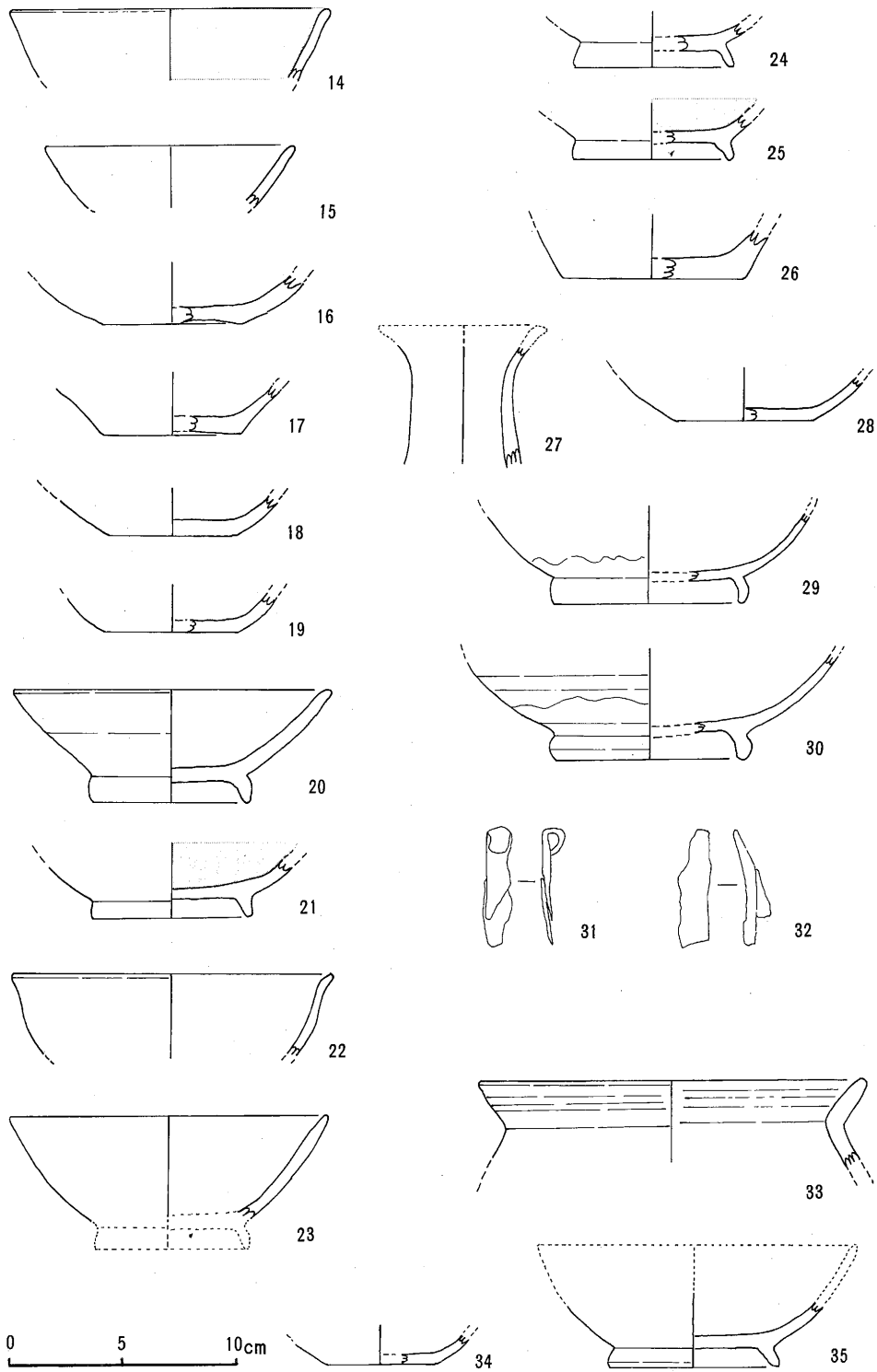
須恵器は量的には少なく、器種も大甕・坏・長頸瓶で、特殊用途が考えられるものである。灰釉陶器は椀と皿が中心となっており、日常的使用が多くなったことを示している。東濃方面との交易が多くなったことを示すと同時に、それらを求められる経済的な向上も考えられる。灰釉陶器は胎土に小石を含む29があったり、器内面にざらついた感じで釉薬がかかった7、9、29、30等があったりして、やや粗雑な感じを受けるものもある。大量生産化への傾向を示すものではないだろうか。

これら遺物は前回報告してある遺物と同時期の内容を示し、10～11世紀代と考えたい。

(山田瑞穂)



第36图 第1号住居址出土遺物



第37图 第2、3号住居址出土遺物

第9章 白山神社横遺跡試掘調査

1 調査位置

三郷村大字明盛1586番地1、1586番地2

2 確認調査日

平成16年4月15日(木)

3 調査参加者

調査指導員：山田瑞穂

調査員：木船 清・中田育成・那須野雅好・土屋雄司

4 調査の目的と方法

白山神社横遺跡は、遺跡名として「長野県史地名表」「三郷村誌地名表」に記載があり、縄文期の凹石を単独出土したことで知られていたが、遺跡の内容は不明であった。『三郷村埋蔵文化財（資料集）』には、出土した凹石の実測図が記録されているが、凹石というよりは石臼と呼んだ方が適切と思われるもので、これのみ単独出土では縄文期と特定するのも躊躇したくなる石器である。今回、想定される遺跡範囲の南隣りに宅地造成が行われることになったため、上記不明点の解明を含め、遺構の存否や遺跡の範囲、土層状況、出土遺物等を把握すべく試掘調査を実施することにした。また、白山神社南隣りには、かつて円満寺なる寺が存在した¹と聞くので、その遺構の存否も含めて調査に当たった。

調査は、重機で表土を掘り下げて遺構の存否や出土遺物に留意した。

5 調査の結果

調査地の旧水田に東西方向に2m幅のトレンチをA・Bと2本設定して調査に当たったが、遺構・遺跡は何も確認されず、遺跡の範囲外であることが判明した。

土層は耕作土（20～25cm）の下に黒褐色土（小礫混じり）がAトレンチで15～20cm、Bトレンチで20～25cm続き、礫層へ移行する層序となっている。Ⅱ層の小礫混じりの黒褐色土は、一部分深いところ（Aトレンチ西端、Bトレンチ西端と中ほどで50～60cmの厚さになる箇所あり）が観察されたが、人為的なものではない。

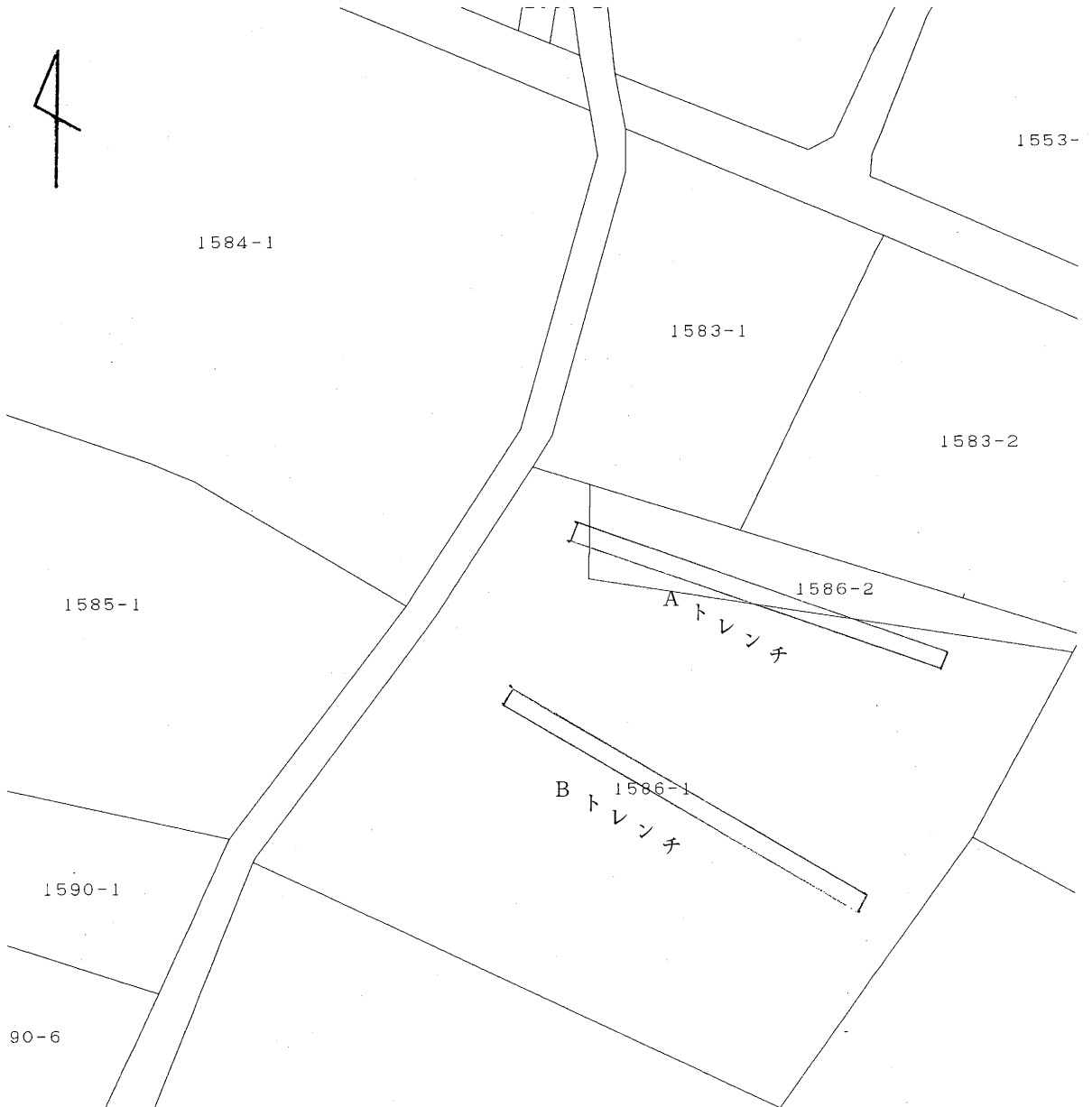
¹ 矢野口佳郎氏ご教示。

6 まとめ

試掘調査の結果、何ら遺構・遺物の確認がなく、白山神社と今回の調査地の間には耕作地があることから、縄文期の遺跡は小範囲のものと考えられる。また、円満寺跡も試掘地までに及ぶ規模のものではなく、中間の耕作地内に所在した可能性が強い。

いずれにしても、今後の調査にその結果を待ちたい。

(山田瑞穂)



第38図 トレンチ配置図

二木豊後屋敷跡試掘調査



表

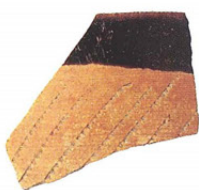


1

裏



2



3



4



5



6

出土遺物



調査風景



Aトレンチ全景 (東から)

五反田遺跡発掘調査



第1号住居址と埋甕



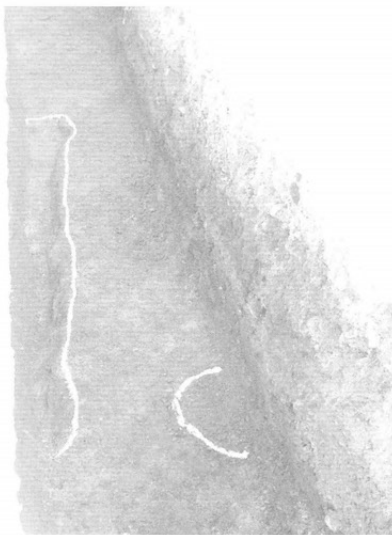
埋甕蓋石除去後



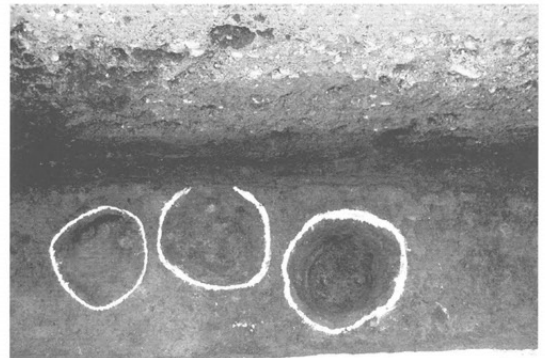
調査風景



第2号住居址



竪穴状遺構と土坑



土坑12~14完掘

龍峰寺跡試掘調査



遺構検出



甕出土状況



甕完掘後



柱跡痕列



柱跡痕



礫石痕

三角原遺跡範囲確認調査



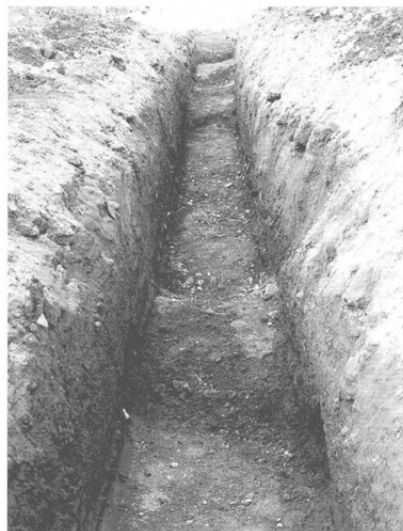
Aトレンチ第1号住居址



Aトレンチ土坑



Aトレンチ流路



Bトレンチと竪穴状遺構



竪穴状遺構出土安山岩



調査風景

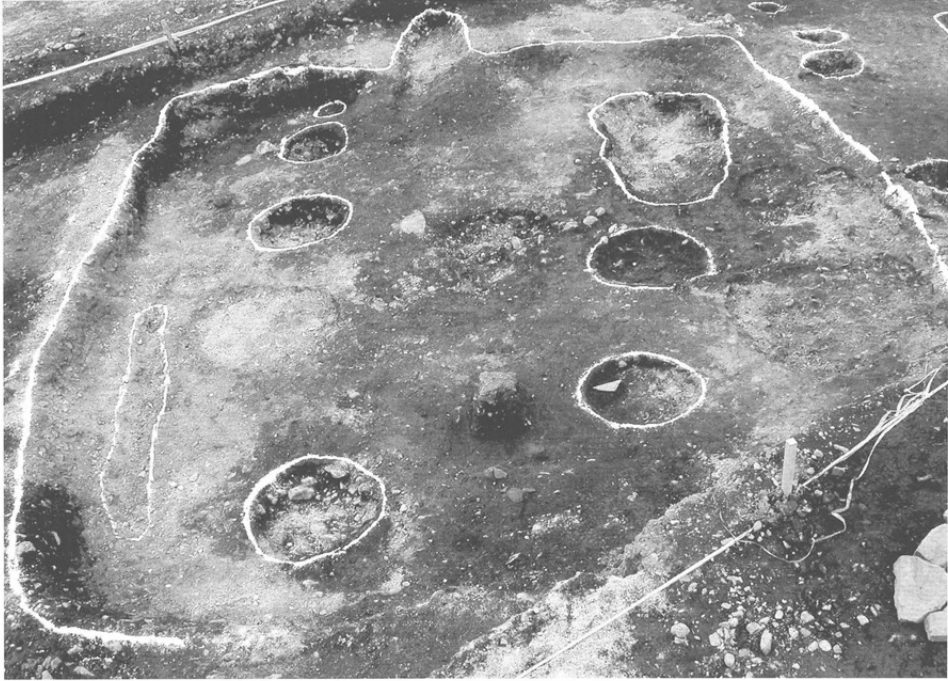
三角原遺跡Ⅱ次発掘調査



調査前全景



調査区全景



第1号住居址（東から）



第2号住居址（東から）



第1号住居址遺物出土状況



第1号住居址遺物出土状況



第2号住居址遺物出土状況



第2号住居址遺物出土状況



砥石 (左: 仕上げ砥石、右: 荒砥)



墨書土器

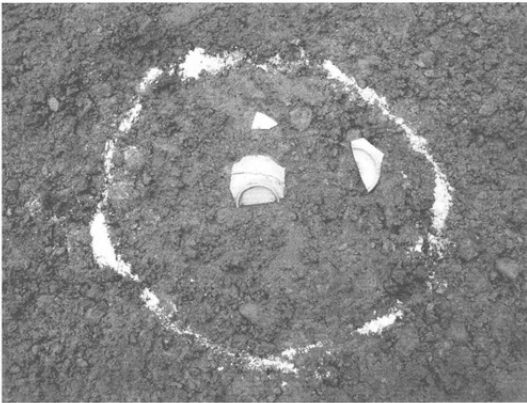
栗の木下遺跡試掘調査



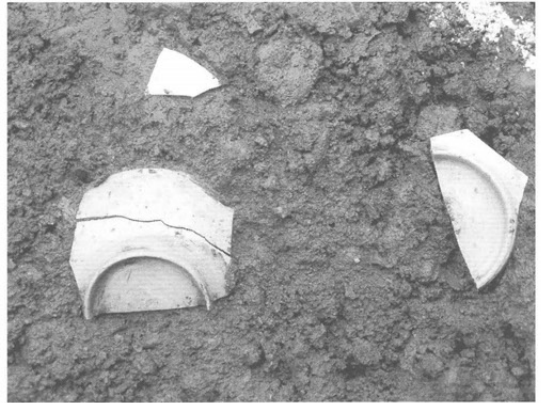
Aトレンチ調査風景



Cトレンチ土壙



Cトレンチ土壙遺物出土状況



Cトレンチ土壙遺物出土状況



Cトレンチ土壙遺物出土状況

三郷村埋蔵文化財Ⅱ 抄録

ふりがな	みさとむらまいぞうぶんかざいⅡ
書名	三郷村埋蔵文化財Ⅱ
副書名	発掘調査・試掘調査報告
巻次	
シリーズ名	三郷村の埋蔵文化財
シリーズ番号	第7集
編著者名	山田 瑞穂、今村 克、那須野 雅好
編集機関	三郷村教育委員会
所在地	〒399-8101 長野県三郷村大字明盛4810番地 1 TEL 0263-77-2109
発行年月日	西暦2005年9月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふたつぎぶんごやしきあと 二木豊後屋敷跡	めいせい 明盛	204668		36°15'39"	137°53'55"	2001/9/18	200㎡	宅地造成
ごたんだいせき 五反田遺跡	おぐら 小倉	204668		36°15'54"	137°50'44"	2002/9/12-9/21	72㎡	下水道
りゅうほうじあと 龍峰寺跡	ゆたか 温	204668		36°16'08"	137°53'3"	2003/7/28	495㎡	個人住宅
さんかくぼらいせき 三角原遺跡	ゆたか 温	204668		36°16'09"	137°52'30"	2003/10/8-10/9	440㎡	範囲確認
さんかくぼらいせき 三角原遺跡	ゆたか 温	204668		36°16'32"	137°52'37"	2003/11/12-11/13	280㎡	農業水路
さんかくぼらいせき 三角原遺跡	ゆたか 温	204668		36°16'21"	137°52'36"	2005/9/26-10/2	65㎡	農業施設
くりきしたいせき 栗の木下遺跡	ゆたか 温	204668		36°15'22"	137°52'56"	2003/12/1	80㎡	宅地造成
はくさんじんじやよこいせき 白山神社横遺跡	めいせい 明盛	204668		36°15'35"	137°54'03"	2001/9/18	60㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
二木豊後屋敷跡	城館跡	江戸時代	なし	陶磁器	
五反田遺跡	集落跡	縄文時代	敷石住居址1、 竪穴住居址1	縄文土器（前期、中 期）、石器	敷石住居址を確認。
龍峰寺跡	寺院跡	江戸時代	柱痕跡	陶磁器、内耳土器、 鉄釘	明治初年の火災跡を 確認。
三角原遺跡	集落跡	平安時代	竪穴住居2	土師器、須恵器、黒 色土器、砥石	集落範囲の北西端が ほぼ確定した。
栗の木下遺跡	集落跡	平安時代	土壇4	灰釉陶器	焼土をもつ土壇墓を 確認。
白山神社横遺跡	散布地	縄文時代	なし	なし	

三郷村の埋蔵文化財第7集

三郷村埋蔵文化財Ⅱ

発掘調査・試掘調査報告書

2005

編集・発行 三郷村教育委員会
長野県南安曇郡三郷村大字明盛4810番地1
電話 0263-77-2109

印刷 電算印刷株式会社

